
IS 緑を纏うもの

狂雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 緑を纏うもの

【Nコード】

N3954X

【作者名】

狂雲

【あらすじ】

雨裂霧人、彼はとある事件により両親をなくしてしまう

それから10年霧人は両親を殺したIS、そのISのための学園に
来ていた。生徒として

IS学園で、笑いあり、涙あり、血しぶき（一夏の）ありの学園生
活をどうぞ

メインヒロインは筈です

IS学園生活スタート（前書き）

こんなものを書いてみました
気に入っていただけたら幸いです
どうぞ

IS学園生活スタート

頭上をミサイルが飛んでいく

「霧人！速くこっちに来なさい！」

「待ってよ！母さん！」

三人家族が森の中を駆ける

頭上では白い謎の機体が飛んでくるミサイルを次々と落としていく

「もう少しで避難区域から出る！それまで走り続ける」

父親らしき人が隣に走っている母親らしき人と後ろを走っている少年に声をかける

少年はふとミサイルを落とし続けている機体に目を向ける
するとその機体はこちらを向いた

自分に向かってくるミサイルを落とすためだろう
銃のようなものをこちらに向ける

「父さん！母さん！危ない！！」

少年は両親に向かって手を伸ばす

刹那

ビームのようなものが目の前、自分の右目と右腕、さらに両親を直撃する

少年は爆風で吹っ飛ばされた

「なんだ・・・痛っ！」

右目と右腕に激痛が走る
右目がまったく開かない。恐る恐る右目を触ってみる
すると再び激痛がはしる

「どうなってるんだよ・・・これ」

右目を触った自分の左手を見ると血で真っ赤に染まっていた
慌てて右腕も見る
手首から肘までが血で真っ赤になっている

「なんでこんな・・・！父さん？母さん？」

少年はあたりを見回す
あるのはさっきまで自分たちがいたと思われる場所にあるクレーター
それと木々だけである

「父さん！母さん！どこにいるの？返事してよ！」

しかし、返ってくるのは静寂だけ
少年はだんだんと意識が遠くなってくるのを感じた

「父さん・・・母さん・・・どこ？」

それだけ言うと少年はその場に倒れてしまった・・・

青年が体を起こす

「また、あの時の夢か・・・」

最近は見なかったのにな
これから通う学園が原因かな・・・

「とりあえず着替えよう」

「ご飯の準備出来てるわよ、霧人」

「分かったよ、義母^{かあ}さん」

俺は雨裂霧人（あまざき、むと）

今16でこれからとある学園に入学することになる

あの夢はいまから10年前の白騎士事件と呼ばれる日本を恐怖のどん底にまでおとしかけ

世界の男尊女卑を女尊男卑にひっくり返した事件である

この白騎士と言うのはI S ー インフィニット・ストラトスーと呼ばれる兵器の名前だ

元は宇宙で活動するためのマルチフォーム・スーツだったが今では飛行パワード・スーツとして戦争の抑止力に使われている

「でもホントに行くの？I S 学園」

「受験も受けて合格したからね、もちろん行くさ」

「気分を悪くするかもしれないけどあなたの両親、私の義弟、義妹が死んだのは・・・」

「分かってる、でも本人たちから謝罪はしっかりと貰った。むしろ、あっちだって人を殺してしまったってひどく落ち込んだし」

「もう吹っ切れたの？」

「うん、乗り越えることにした、10年前に」

「そう、なら安心したわ。ごめんなさいね、思い出させて」

「大丈夫だよ、義母さん。心配してくれてありがとう。ごちそうさま」

俺は飯を食い終わり、学園・・・俺の両親を殺したISの専門学校、IS学園に向かうため支度をした

IS学園に向かうためのバスに乗っている

バスの中には仕事でたまたまIS学園行きのこれに乗る人以外がIS学園の制服を着た女子である

そう、ISはなぜか女性しか操れないのである

なので、IS学園の制服を着ている俺を女子どもは不思議そうな、興味津々のような目で俺を見ている

俺は自分の右手につけている、黒いグローブに目を落とす
うちがね
打鉄改、俺の飯の専用機

などと考えているとだんだん眠くなってきたので寝ることにした

「話とはなんだ？霧人」

「ああ・・・」

「・・・？」

此処はとある中学校の屋上である

季節はもう冬も終わる3月の下旬である

「篠ノ之箒」

「な、なんだ」

「俺と付き合って欲しい！」

「・・・！」

俺は両親を殺したIS・・・それを作った篠ノ之束しののたばねの妹、篠ノ之箒ほづきに告白をしたのだった

惚れた理由は一目惚れだった

篠ノ之箒はISを開発した束さんのせいで重要保護プログラムとか

いうのによつて日本を転々としているらしかった

それで俺が通っている中学校に来たのだった

俺の中学校は小中一貫校と言う割と珍しい学校で、生徒会長を決めるのも珍しい方法だった。現生徒会長とある議題で話し合い、勝った方が生徒会長になれるというものだ

資格は1年でも生徒会をしていることだったので小6の時に生徒会に入っていたためあっさりと受けることが出来た

しかも、女尊男卑のせいで最近女子しか生徒会にいない俺はとも浮いた状態で生徒会の活動をしていた。男子からは英雄なんて呼ばれていた

現生徒会長は今の世界を象徴するかのごとくの人だった。前から生徒会に入っていた俺を常に見下していた。男は所詮クズ・・・それがあの人に口癖だった

なので今までの鬱憤を晴らすためにコテンパンに打ち負かしてやった口で俺に勝とうなど100年早いんだよ

というわけで俺は学校初の1年で生徒会長になっていた

そんな時に箒は転入してきた

最初は周りから興味と軽蔑のまなざしやISについてあれこれと聞かれて困っていた

その時の箒の顔は悲しい顔をしていた

なのでみんなに言つて質問をさせないようにした

箒は剣道部に入ってきたときは内心で飛び跳ねていた

だが、箒の剣はただの暴力だった

周りの連中はただ強い、すごいと言つてただ褒めていた

俺はあれではいけないと思い、箒の練習にはいつもついていた

あるとき、箒に面と向かつていった、お前の剣はただの暴力だと

箒はそんなことないと言っていたが俺は退かずに勝負を挑んだ
なぜかと言うと、俺も暴力に沈んでいた時があったからだ
箒の姿がかつての俺と重なる

俺は言った、お前の振るう剣は剣道ではなく剣術だ、と

剣の道に暴力はない、剣の術は暴力しかない

お前にそんなことが分かるのかと箒に言われた

もちろん、俺は剣術をつかえるんだからと言い、俺は剣術「絶刀」
を使った

その後、箒は自分の過ちを認め、俺に泣きついてきた。嬉しさと恥
ずかしさで顔が赤かったが見られてなかったので良しとしよう

何て事をしていたら余計に箒に惹かれてしまった

そして2年も終わるといふ頃急に自分の気持ちを伝えなければなら
ないという衝動に駆られた

だから告白したのだ。この判断は間違ってたと気づくのは3
年になってからだった

「すまない、私にはほかに気になっている奴がいる、だから待つて
ほしい」

「そうか、なら答えを教えてくださいるまで俺は待つからな」

だが3年になった時、箒は別の学校に行ってしまった

結局、箒の答えを聞くことが出来なかった

ガタンッ

「んっ、ついたか」

まさかまた夢をみるとは

バスを降りるとそこにはとてつもなく大きな学園が存在していた

そして校門の前にはうなだれているIS学園の制服を着ている男子がいた・・・？

「おい、そのの」

「えっおれ？」

「そうお前」

俺は男子に話しかける、そいつは顔は上の上くらい、背は170くらいか、俺は178だ

「あれ、なんであんたもこの学園の制服を？」

「ここの生徒になるからな、お前もそうだろ？」

そう言うたそいつはさっきまでのテンションが嘘みたいに明るくなった

「そうなのか！俺一人だと思ってたよ！」

すごいテンションだな、おい

「お前、名前は？俺は雨裂霧人」

「織斑一夏だ、よろしく」

やはり男同士、すぐに仲よくなった

「ぐぬぬぬぬ」

「一夏、耐えろ」

「なんで霧人は平気なんだ」

ただいま、教室内である

女子から興味のまなざしで見られ続けている

俺は中学校で生徒会の女子からこれと全く同じまなざしを3年間受け続けたため苦にならない

「慣れる、こんなもの1週間で慣れるぞ、経験者だからな」

「そうなんだ」

「皆さん、席についてください」

つとこの人が担任か？

「今日からみなさんの副担任になる山田真耶やまだまやです」

山田先生がいさつしたが一夏と俺がいるために変な空気が漂っている

「えーと、では自己紹介してきましょうか」

大丈夫か、この先生は？

「では、雨裂君どうぞ」

さて、どんな紹介の仕方をしようか

「雨裂霧人です、趣味は読書、料理や家事です。これから、お願いします」

「きゃ~~~~~」

おわっ、なんじゃいなまったく

「かつこいい！！すごいイケメン！！生まれてきてよかった〜」

言いすぎださすがに、俺は席に着く、ふと一夏を見ると青ざめている、大丈夫かこいつは

「織斑君？織斑君！」

「はっはい！？」

一夏は・・・おそらく自己紹介の内容を考えていたのだろう
山田先生の声に対して素っ頓狂な声をだした

「えゝ、織斑一夏です・・・」

周りからはもつと喋ってオーラが出ている
おや・・・なんであの人がここにいるんだ・・・？
ん？織斑・・・そうかそうだったのか

「以上です」

「ごん！！」

みんな一斉に机に頭をぶつけた

スパアアン

「いったあ」

「まともに挨拶も出来んのかお前は」
「ちっ千冬姉」

スパアアン

「織斑先生と呼べバ力者」

「織斑先生、会議が終わったんですか」

「ああ、山田先生すまなかったな」

織斑千冬・・・俺の両親を殺した白騎士張本人であり元世界最強のIS操縦者である

「さて、私が貴様らの担任である、織斑千冬だ。貴様らを1年間で使い物にするのが私の役目だ」

「きゃ〜〜本物よ！！本物の千冬様よ〜〜」

「わたし千冬様に会うために北九州から来ました」

遠路はるばるお疲れ様です。え〜とたしか村木さん

「は〜、まったく毎年こういう馬鹿者しか来ないのかこのクラスは」

「織斑先生、お久しぶりです」

「・・・！久しぶりだな・・・雨裂」

「もう、後悔する必要もないですよ、あれは事故ですし」

「お前は何とも思わないのか」

「前にも言いましたよ。乗り越えると、そして乗り越えましたし」

「そうか、お前が超えたなら私も超えるか」

「それがいいです」

1時間目はただの世界史だった
そのため簡単だった

「ちょっといいか？」

「箒」

「えっ？霧人、箒を知ってるのか？」

「ああ、中学の時な」

「一夏いいか？」

そう言つて二人は教室から出て行つた・・・もしかして筈が気に入つてゐるやつて・・・一夏か？

授業が始まる直前に二人が戻つてきた

2時間目はISについてだつた

俺は中一の夏にこの打鉄を買つたわけだしそのころから勉強してたから問題ないけど・・・

一夏は全くだつた。青ざめている、絶対分かつてないよこいつ

「ここまでで、分からないことがありますか？」

これは初歩の初歩であるからして分からない奴は普通はいない一人を除いて

「織斑君？どうしました？」

「えゝと、分かりません」

「どこがです？」

「全部です・・・」

「ホントですか・・・ちなみにここまでで分からないことがある人はゝ」

一夏は俺に期待のまなざしを向けるが俺は分かっているため手をあげない

「織斑、受験後にもらつたISの教科書はどうした」

「あれは・・・電話帳と間違えて捨てました」

スパアアン

「ぐおおおお」

「貴様にはもう一つくれてやる。1週間以内にすべて覚えろ」

「えっあれを？」

「貴様に拒否権はない」

そんなことで授業は終わった

「ちよつとよろしくて？」

「んあ？」

「なんだ？」

一夏の目の前には金髪ロールで碧眼、真っ白ともいえる肌、碧眼の目には俺たちを見下してる

「まあ、なんて態度ですか？この私が話かけてるのに」

「いや、俺あんたの事知らないし」

「この私を知らない？」「イギリス代表候補生のセシリア・オルコツトだろ」・あなたは知っているのですね」

セシリアは少し驚いた様子だ

「ちなみに一夏代表候補生とは国家の代表になれるかもしれない奴の事だ」

「なるほどね、つまりはエリートと」

「そう！エリートなのですわ！その私と同じクラスと言っただけで幸運なことですわ」

「そうか」

「いいことだな」

「ばかにしてます？」

「お前が幸運だって言っただんだろ」

「右に同じだ」

セシリアは若干怒り気味だ

「で、一夏に何の用があるんだ」

「・・・そうでしたわ。エリートたる私がISについて教えて差し上げようかと思いましたが、土下座をすれば教えますわ」

「そんなことしなくても、霧人が教えてくれるし」

「なっエリートである私を差し置いてこの男に教えることは。私は今回の受験で唯一教師を倒したというのに？」

唯一？何言ってるんだ

「受験の時か、なら俺も倒したぞ」

「俺も倒した」

「なっ私だけと聞きましたのに？」

「女子ではってことだろ」

綺麗にはもって俺たちは言った

そしてセシリアが何かを言おうとした瞬間チャイムが鳴った

「くっ続きはまた今度ですわ。逃げないでくれます!？」

「どこに逃げれるんだよ」

「さあ？」

授業中織斑先生が何かを思い出したような顔をしてこちらを向いた

「そういえばクラス代表戦のための代表を選ばなければならないな。誰か候補者はいないか？推薦でもいいぞ」

「織斑君をすいせんします」

「私も」

「他にはいないか？推薦者には拒否権はないぞ」

なに！それは御免こうむる

「俺は立候補します」

これで一夏に押し付けられる。セーフ

「納得がいきませんわ！！」

セシリアか・・・

「このエリートであるセシリア・オルコット以外が代表になるなどあり得ませんわ。珍しいだけの極東の猿などに任せられることではありません」

俺と一夏はその言葉にカチーンと来た

「そもそも、わたくしがこの極東の地にいるだけでも・・・」

「そこまでにしとけよ自信過剰愛国者」

「そうだよここにいたくないなら不味い料理で何年間も1位にいる国にさっさと帰れ」

上が俺、下が一夏である

「なっ私の祖国を侮辱するのですか」

「先に侮辱したのはソツチだ」

「ならば、決闘ですわ！！」

「おう、四の五の言うより早いからな」

「もしあなた方が負けたら私の奴隷にしますわ」

「上等だ、でハndeはどのくらいつける？」

「あら？早速お願いですか？」

「いや、俺がどれだけハndeをつければいいかって聞いてんだよ」

一夏・・・喋り過ぎ、しかもハndeって俺じゃあるまいしお前じゃ無理だろ

「織斑君、本気で言ってるの？」

「男が強かったのは昔の話だよ」

「それは違っただろ」

俺はその話に加わる

「女が強くなつたのはISに乗れるからだ。でもここにはISに乗れる男がいる。立場は同等なら分らないだろ？」

周りは静まる

「だがな、一夏。お前はISに乗っている時間が少なすぎる。そんなお前がハndeをつける必要はない」

「でも！」

「むしろハndeをつけることは相手を侮辱することだ。そこまではしたくないだろ？」

「そうだな。ちょっと暑くなり過ぎた」

「話は決まったな。では一週間後、織斑とオルコットがまず戦うという事でいいな」

「・・・はい」「・・・」

放課後

「一夏貴様なぜこれほど弱くなっている」

「中学は部活してなかったんだよ」

一夏は箒に剣道で負けていた
事の経緯は決闘を一夏が勝手に決めたので箒と俺にISの操縦やらを聞きに来たからである

そこで箒はまず剣道の腕を見ることになったのだが

「鍛えなおす！」

「え？俺はISについて聞きたいんだけど」

「それなら俺が教えてやる。お前は箒に絞られる」

「まじで！！って箒！待ってくれ。ぎゃああああ・・・」

「ふう」

「お疲れ、箒」

一夏？向こうで死んでるよ。表現でな

俺が箒にタオルを渡すと箒は驚いた顔をした

「ほれ」

「ああ、すまん」

「箒、答えはでたか？」

「・・・！すまん、まだだ」

「そうか、でもそれはお前の気持ちだ、俺はどっのどっの言つつも
りはない」

寮内

「ここが俺の部屋だな」

一夏はいまだに死んでたからおいてきた
二人で一部屋らしいからおそらく一夏と相部屋だろう

「鍵を・・・開いてる」

誰かいるのか？

そつとドアを開けて中に入る奥のベッドに道具が置いてある
女子と同部屋ってまじかよ・・・

しかも相手はシャワーを浴びてるらしい

仕方ないので道具を置き最近買った料理本を読み始める

「ふう、おや？来たのか。私が同じ部屋の・・・」

「箒か？その声、服を着たらどうだ」

俺は本を読んでるため箒の姿を見ていない

箒は少しの間固まっていたがすぐに着替え始めた

「なんで霧人がここに？」

「なんでと言われても山田先生にこの部屋の鍵を渡されたんだ」

「そうか・・・そうだシャワーを使う時間だが、私が7時から8時、
霧人が9時から10時の間で」

「うん、了解した」

しばらくの沈黙

「霧人、なぜお前は私の事が好きなんだ？」

「最初は一目惚れだな」

箒は顔を赤くしてうつむいた

「私はもう寝る」

「そうか、お休み」

「ああ、お休み」

俺もシャワー浴びて寝るか

IS学園生活スタート（後書き）

どうでしょうか？

感想とか来たらいいな

主人公紹介

主人公 あまてきむし
雨裂霧人

年齢 16 顔 上の上 右目の周辺に右目を囲むように傷跡がある
身長 178 髪 黒で一夏と同じくらいの長さ

詳細

剣道の名門雨裂家の分家の長男として生まれる、幼い時から剣術の雨裂流と剣道を習っていた

6歳の時、家族と旅行中に白騎士事件に遭遇、その際両親を亡くし自分の右目と右腕にけがを負う

その後病院で白騎士事件の犯人である、篠ノ之束と織斑千冬に謝罪され二人を許すとともに両親の死を乗り越えた

事件後は、本家に引き取られより本格的に雨裂流と剣道を学んだ

実力は小学1年でありながら小学生の全国大会で優勝するほどである
中学の時に箒に出合い一目惚れ、その後何かと世話を焼く、中一の夏休みに束に遭遇、束からISのコアと打鉄をもらう、ISのコアを自分に慣らすついでに打鉄を改造、そのため半専用機のような状態になっている

中二の冬に箒に告白したが答えは聞けずじまいで箒が引越してしまった、しかし今でもあきらめてない

中三は箒の事をうつすら考えながら生活していた

ちなみに生徒会長の座を求めて勝負を挑んできた先輩、後輩を3年間退け続けた

現在は、IS学園で学園寮生活をしている、同居人は箒

流派 雨裂流

戦国時代から続く有名な流派、戦国時代では殺人剣として受け継がれてきたが江戸時代から活人剣として受け継がれてきた。殺人剣時

代は天裂流という名前だった

活人剣だが威力によつては殺人剣にもなりえる

霧人が現在25代目当主であり、最年少当主である

技 『絶刀』一々十閃 『居合』斬刀 『奥義』天裂 『秘技』千迅

IS 仮の専用機 打鉄・改^{うちがね・かい}

霧人の実力を十分に発揮するために機動性を高めた機体

武装は近接ブレード一振りだけ

機動性以外は普通の打鉄である

クラス代表決定戦（前書き）

今回はクラス代表決定戦のお話です
どうぞ

クラス代表決定戦

「〜と、これがISの大まかな歴史だな」

「なるほど・・・でなんで歴史から勉強してんだ？」

「だって一夏、お前ISについて知らない過ぎなんだもの」

「ぐっ！返す言葉がない」

放課後の教室には俺と一夏しかいない

そして一夏はISの教本と格闘中だ

「明日には、お前の専用機が届くから今日のうちに操作方法も説明しとくか」

「えっ？たしかギリギリまで掛るとか言ってたかったか？」

そう一夏には特別に専用機が来ることになっているのだ

俺はもうあるし、仮だけど・・・本当の専用機はまだ造り中だからな

「俺が倉研に行って手伝ってきたから」

「倉研って倉持技研？よく行けたな」

「なに『ちんたらちんたらIS作ってんじゃねーよ！俺に任せな！』って言ったら協力させてくれたよ」

「そのセリフだけで開発スタッフ動かせるなんて・・・」

「ほらちゃっちゃと終わらせるぞ。この後は筭の訓練（お仕置き）だぞ」

「・・・おう」

そんなにトラウマか、最後声がすごく小さかったぞ
合掌しておこう、心の中で

それから

「よし、あとは実戦形式で教えるだけだな」

「そういえば霧人は専用機を持つてるのか？」

「ああ、一応な」

「一応？」

「ああ、本当の専用機はまだ造り中なんだ」

「なんで？」

「武装は全部決まったんだがな？ISの姿と色、名前が決まらなくて」

「へー、そうなんだ。霧人でもそんなことあるんだな」

「俺を完璧人とでも思っていたのか……。完璧な人なんていないだろうが」

「・・・そりゃそうだ」

「箒の訓練、頑張れよ」

「おう！」

自棄っぽい一夏君であった

お前のISを参考にするなんて言ったらお前は何ていうのだろうか
お前なら笑って許可するか

次の日、代表決定戦まであと三日

「これが・・・」

「お前の専用機、白式だな」

「・・・これが」

上は一夏、下は箒、真ん中はもち俺です

そう、一夏のIS『白式』びやくしきである

色は名前の通り白で所々に青も見える

「さて、早速乗ってみようか、一夏」
「おう」

一夏が白式に触る、すると待ってましたと言わんばかりに白式がキ
ュインと鳴った

「これが何なのか、どうすればいいかが分かる」

「・・・（普通、俺も一夏もISには乗れない、俺はコアに気に入
られたから乗れるが、一夏はそうではない・・・、ならなぜだ？分
からないな・・・まったく）」

「霧人、つけたぞ」

「お、なら早速移動してみようか」

一夏は俺が教えたとおりに移動および飛行を行う

「飛行は難しいな、ほんとに」

「意外と簡単だと俺は思ったがな」

「うわっ！霧人！いつの間に隣に？」

「お前がのろろと飛んでるから実際に飛びながら教えようと思っ
てな」

俺は打鉄・改を装着して一夏の横に並ぶ

「それが？」

「俺の飯の専用機、打鉄・改だ」

「打鉄って訓練機なの？」

「ああ、束さんからISのコアと一緒にもらったんだ」

「束さんから？いつ貰ったんだ？」

「中一の一夏だな」

「そうなんだ・・・箒は知ってるのか？」

「いいや、知らないだろう。俺が専用機持ちっこすることな」

実際に驚いてるし

「さあ、本格的に練習するぞ」

「ああ！」

決定戦当日

「よし、あれだけ練習したんだ、ばっちりだろ？」

「ああ、行けるはずだ！」

「はずだ！じゃなくて勝て」

箒さんは言葉に棘があり過ぎだよ

好きっていうかむしろ嫌ってると思われるぞ・・・一夏限定で

ファーストシフト

「一次移行も済んでるし、あとは油断しないことだな」

「分かってるよ、行ってくる」

そう言つて一夏はピットから飛び出した

「あんなに浮かれた顔でよく言う・・・」

俺の呟きは誰にも聞こえなかった

「あら？逃げずによく来ましたわね」

逃げる？買った喧嘩なんだから逃げるわけないだろ

「最後のチャンスを与えますわ、泣いて謝れば許してあげてもいいですわ」

「警告！敵ISからロックされていますー」

分かってる、霧人から聞いた通りセシリアは銃口を少し上にあげ俺に狙いを少しつけている

「泣いて謝る？そっちがするんじゃないのか？」

「いい度胸してますわね・・・なら！落ちなさい！」

言葉と共にセシリアが持っているライフルからレーザーが迫るがわかってるから回避は簡単だ！

「初撃を躲すとは、でもいつまで持ちますかしら？」

さらにレーザーを放ってくる、でも躲せる！

「あいつ、言ったことちゃんと覚えてるのか？」

いささか不安だな、ああまで浮かれてると

「ここまでやるとは正直思っていませんでしたわ」

「俺は、まだ本気じゃないぜ」

「それは私もですわ」

セシリアの専用機『ブルー・ティアーズ』これには名前と同じビツトと呼ばれる兵器がある

詳しい名前は難しくて憶えてない

セシリアはそれを展開する

「4つか・・・行けるな！白式！」

俺はセシリアに向かう

「あのバカ、忘れてるのか？」

ビットは4つではなく6つあるということ
を白式・・・お前が頼りだ

「その程度か？」

俺はビットをすべて叩き落とした

「まさか・・・ここまでやるなんて・・・」

「勝たせてもらうぜ、俺は守りたいものがある、譲れないものがある」

「？何を言ってるんですの？」

「行くぞ！！」

俺はセシリアの放つレーザーを避けてセシリアの懐に入る

「かかりましたわね、ブルー・ティアーズは六機ありましてよ！！」

私の勝ちですわ！！目の前で爆発が起こる

接近され過ぎていたために少しシールドエネルギーが削れましたけどもういいですわね

「油断！！」

いきなり目の前の煙が晴れ彼がほぼ無傷で出てくる

「なっ！何でですか？」

彼は全身を黄色いオーラで包まれていた

「大敵！！」

俺は単一仕様能力『ワンオフ・アビリティ零落白夜』をセシリアにあてる

あのビットが六機あることなんて最初から知ってた、でもわざと知らないふりをして油断するときを狙ってたんだ

セシリアに零落白夜を発動した雪片式型を、千冬姉の剣を直撃させる
こいつはシールドバリアーを無視してシールドエネルギーに直接攻撃をして絶対防御を発動させシールドエネルギーを一気に削ることが出来る

セシリアのシールドエネルギーが零になった瞬間

『勝者、織斑一夏』

俺に勝ちだ！！

「うっむ、はめられた、一夏の分際で」

一夏わざとだったか、気付くのに時間がかかったよ

「お疲れ、一夏」

「ああ、でも勝ったぜ」

「休憩時間は一時間だ。次は霧人とだぞ」

「分かってます。織斑先生」

一夏は最近ようやく織斑先生と呼べるようになった
まあ出席簿で殴られ続けりや嫌でも呼べるわな。呼べなけりやただ
のマゾだ

「一夏、お互い全力でな」
「もちろん」

俺はさっきセシリアがいたピットに向かう

「オルコット、何してるんだ？」
「私の勝手ですわ」

ピットに行くといまだにセシリアがいた
俺はお構いなしに打鉄・改の様子を見始める

「守りたいものがあると強くなれるのですか？」

いきなりセシリアにそんな質問をされた

「・・・そうかもしれないな、一夏はだから強いんだろうな」
「あなたは、あるのですか？守りたいもの」
「・・・ない、俺は何もない」

「誇りや家族も？」
「ああ、ない。俺にあるのは強くありたい。それだけだ」
「そう・・・ですの」

それだけ聞くとセシリアはピットを出て行った

「守りたいもの・・・か。簞は・・・どうなんだろうか」

当てはまるのか？特に考えたことがないから分らない

「箒は・・・どうなんだろうか」

つい聞こえてしまった。どうとはなんだ？

私は自分の行動がいまいち理解できてない

気が付くと霧人がいるピットに来ていた

セシリアと何かを喋っていた後にいきなりさっきの言葉が聞こえたのだ

何故だか顔が赤くなるのを感じていた

それを押さえるのに相当時間がかかったのは箒だけの秘密である

「気をつけるよ、霧人」

「おう、ありがとな」

霧人はそれだけ言うとピットを出て行った

とても嬉しそうな顔だった

それほどに私を好いてるのか・・・？いかん、また顔が・・・／／

「さて、やるか！一夏」

「いくぜ！霧人」

二人して近接ブレードを手を持つ

「行くぞ！！」

二人同時に動き鏢迫り合いを始める

一旦離れて一夏が大きく振りかぶり縦に振るが俺は身体を少しずらすだけで躲す

隙が出来た一夏に斜めにブレードを振るが一夏も後ろに下がって躲す

さらに接近してまた鏢迫り合いを始める、何度も繰り返した

「さすがだな一夏、剣道をやっていただけある」

「それを言ったら霧人だって剣道をやってただろ？」

「そうだけでもよ、一週間でここまでできるのはすごいよ」

俺も一夏もシールドエネルギーはそこまで減ってない

「これで終わりにするぜ、霧人」

一夏は零落白夜を発動させる
なら・・・全力出しますか

「昇華した剣術『絶刀』みせてやろう」

「昇華した・・・剣術？」

「そうだ、剣術は剣道と違いルールがない。つまりは何をしてもいい、それはただの暴力だと思わないか？」

「・・・確かに」

「俺の家、雨裂はその剣術を剣道へと昇華させた、だか根本は変わらず剣術のままだ」

「暴力をなくした剣術ってことか？」

「そうだ、雨裂流『絶刀』いつまで耐えられるかな？」

「俺をなめるなよ、いくぜ！」

一夏はそのまま突っ込んでくる

「『絶刀』一閃！」

素早く強くブレードをふるう、雨裂25代目当主であり歴代最強とまで言われた俺の剣は音速に近い！

一夏は全くついて行けずに吹っ飛ばされる

「ぐっ！速すぎる！？」

「歴代最強と謳われた俺の最速の一閃だぞ？見切られるはずがない」

最初の閃である一閃は閃の中でも一番速い攻撃だ
これ以降の閃は数と威力で決める技だ

「まだ、始まったばかりだぜ！一夏！」
「負けるわけにはいかねえ」

一夏、お前が何を思い何を背負うかは知らない、だがとても重いものであることぐらいは分かる
だがな、俺も負けるわけにはいかない、当主は最強であれ、これを破るわけにはいかない！！

「『絶刀』二閃」
「くそっ！」

間近まで来た一夏に二閃するが、速さはさっきより遅いため回避された

「振った時に風が切れる音がするなんてどんな力だよ」
「生まれて最初に握ったのが日本刀だぞ？お前とは、振るっていたものが違う」

「（くそっ、何とか懐に入って雪片が当たれば）」
「（このブレード・・・持ってくれよ！）」『絶刀』三閃
「なっ？斬撃が飛んできた？」

突然の事に一夏は対応できずさらにシールドエネルギーを減らす

「やはり、このブレードでは、もう無理だな」

「斬撃が飛ぶなんてありかよ？」

「だから、歴代最強なんだよ」

「生身でもISに勝てるんじゃないか？」

「出来ないことはないかもな」

いかん、マジで出来そうな気がしてきた

「さすがに、もう斬撃は飛ばせないから安心しろ」

「安心できないだろ、まだ」

おっと、気付いてたか、残念

「行くぞ」

二人して接近して鏖迫り合い、しかし

「おらっ！」

「おっ？」

一夏は自分のブレードを斜めにして俺のブレードを受け流した

「もらったー！」

一夏の攻撃が俺に当たる

「やった！・・・！？」

「スペクトルブレード
残像加速」

一夏の目の前にいた俺の姿が消えて俺は一夏の後ろに出現する

「!?!」

一夏はすぐさま後ろの攻撃しようとするが

エターナルイグニッション
「無限瞬時」

俺は一夏の・・・いや、この戦いを見ているすべてから消える
スベクトルブースト エターナルイグニッション
残像加速及び無限瞬時

これらは俺が中学の時に編み出した移動方法

残像加速は細かい動きをその場でして残像を作る、その直後瞬時加
速で相手の背後に回ること的成功する
イグニッションブースト

無限瞬時は瞬時加速を常時し続ける操縦者の身体を壊しかねない危
険なものだ、でもこの打鉄・改はこれをして問題ないように改造
してある

「どこだ？ハイパーセンサーが捉えられてない・・・」

困惑しているな一夏

悪いがこれで終わりだ

「・・・？ぐつ!?!うわあああああ!?!」

俺は無限瞬時のまま一夏をブレードで刻み続ける

一夏のシールドエネルギーが零に近づいたとき俺は無限瞬時を止め
一夏の前に移動する

「ぐつ、はあはあ、え?」

「『絶刀』一閃」

『勝者、雨裂霧人』

わああああああああああああ
パチパチパチパチパチパチ

観客席にいた一年全員が拍手などを送って来た

「一夏？大丈夫か？」

「ギリギリで・・・」

「ならいいや、帰ろうぜ」

「そうだな」

次の日

「クラスの代表は織斑君に決まりました。一つながりでいいですね」
「」

なんで俺じゃないかって？めんどくさいし候補した理由が一夏に押し付けるためだしね

「先生、勝ったのは霧人なのにどうして俺が代表に？」

「俺が辞退した以外に何があるよ？」

「なんで辞退したんだよ？」

「めんどくさい！」

クラスが一斉にこける

「めんどくさいって、それだけ？」

「あと一夏がこれを期に強くなるように」

「それを最初に言え！」

「だが、断る！！」

「なんで？」

「だってさっき思いついたから」

「・・・」

「そういえば、一夏のクラス代表おめでとうパーティーみたいなものやる？」

「やる、やる～～～」

「もちろんだよな」

女子たち大興奮、男子の一夏君のテンションはダークブルー

俺？俺は中間の色で

どんな色か？皆さんにお任せします

授業中

「今日はISの基本的な飛行を実践してもらう。織斑、オルコット、雨裂やれ」

「・・・はい」

俺とセシリアはすぐに展開する

俺は0.4秒セシリアは0.6秒

一夏は少しもたついている

「さつさと展開しろ馬鹿者」

「うっ、はい・・・」

一夏も展開する

「では、飛行を始める」

三人して一斉に飛び立つ

「織斑！遅すぎだぞ！スペックはブルーティーズより白式の方が上なんだぞ」

「そうは言ってもいまだにイメージが出来ない・・・」

「一夏さん、自分が描きやすいイメージを浮かべるのが一番ですわ」

セシリアに教わっている一夏・・・俺の説明ではだめだというのは・・・
・・そうか、そうか

「三人とも！降りて来い、急降下と急停止をつかってな。目安は地面10センチまえだ」

まずはセシリアがお手本と言って急降下、急停止をして見事10センチで止まった

「雨裂、出来るギリギリで止まれ」

「なんだその要望は・・・」

小声のため一夏にしか聞こえない
若干高度を上げて一気に降下する、地面にぶつかるほんの0.1ミリで止まった

はつきり言ってよく見ないと地面についてるようにしか見えない

「やり過ぎたようだ」

織斑先生の呆れた声がある

「織斑、来い」

一夏は勢いよく降下して

地面に当たる瞬間俺は一夏の両足を払い、背中に膝蹴りを喰らわす

「ぐおおお」

「グラウンドにクレーターを作る気かお前は？」

さっきの勢いでは確実に止まれずにグラウンドに突っ込むところだった

「やれやれ、今度は、武装を展開しろ」

俺は0.2秒で近接ブレードを展開する

一夏は0.5秒セシリアは0.4秒で展開する

「オルコット、お前は前の敵ではなく隣の味方を撃つ気か？」

「こっこれは、イメージするのに大切に」

「治せ」

「・・・はい」

相変わらずの威圧感だな

「オルコット、近接武器を展開しろ」

「はっはい・・・」

セシリアは近接武器の・・・インターセプトを出そうとするがなかなか展開できない

「まだか？」

「うゝ、インターセプト！」

これは初歩の初歩の武装展開の仕方である

「何秒かけるつもりだ？ 戦闘なら、負けるぞ」

「懐に入らせなければいいことですわ」

「初心者の織斑に懐に入れただろ」

「うつ・・・それは」

セシリアは一夏を睨んでいた
まったく、騒がしいことで

これからさらに騒がしくなることを霧人は知らない

「ふうん、ここがそうなんだ」

IS学園ゲート前。小柄な身体の少女が、その身に似つかわしくな
い大きなボストンバックを肩から提げて立っていた。左右それぞれ
に高い位置で結んでいる髪を夜風に揺らせながら、少女はくしゃく
しゃの紙を上着のポケットから取り出す。

「本校舎一階総合事務受付・・・どこにあんのよ？」

ぶつくさ言いながら、取り敢えず少女は足を動かす。ここで悶々悩ん
でいるよりも自分で探した方が速いと判断したのだ。

結果、

「もっと迷っちゃった・・・」

宛てもなく歩き回っている内に本気で迷子になってしまった少女。
キヨロキヨロと周囲を見回してみるが、一度も来たことがない場所
なので目印など見つからない。

「はぁ……。ま、いつか。こんだけ奥に来れば誰か一人くらい通
り過ぎるでしょ。その時案内してもらおう」

少女はボストンバックを床の上に置き、その上にちょこんと腰を下
ろした。

（そう言えばあいつ、元気かな）

ふと、そんな考えが胸中を過ぎった。あいつとは、二人目の男性I
S操縦者として全世界に報道された黒髪の青年のことである。その
青年がテレビに出てきた時、少女は本気で飲んでいた飲茶を嘔き出
した。

「……。だから……。でだな」

ふと、遠くの方から声が聞こえてくる。視線を向けると、複数の生
徒達がIS訓練施設から出てくるのが分かった。

「（丁度いいや。場所聞こつと）」

ボストンバックを肩にかけ、少女が声をかけようとするのと、

「だ〜から、そのイメージってのが分らないんだよ」

男の声。自分が一番聞きたかった男の声。

「そんなこと言ってもな、お前のイメージはお前だけのものだから人から教わっても分からないんだよ。だから、鬼ごっことかやってんだろが」

「まあ、それのおかげで前よりはよくなったけど」

予期せぬ再会に高まる鼓動。少女は一旦心を落ち着かせるために歩みを止めて深呼吸。数回深呼吸を繰り返し、再び視線を向ける。そこには、今まで一度として忘れたことのない、艶やかで、流れるような黒髪があった。

（私だって分かるかな？まあ一年ぐらいしか会わなかっただけだし分かるでしょ！ついでに知らない男の声がするけど）

何の根拠もない、でも絶対の信頼がある確信を胸に抱きながら声をかけるために息を吸い込んだ瞬間

「私の説明でなぜわからないんだ？一夏」

「そうですわよ、あれだけ丁寧に教えたというのに」

（え、誰あの二人？）

さつきまで痛いほどに高鳴っていた鼓動は急速に落ち着いていき、酷く冷たい感情が胸中に湧き上がってきた。

その後、少女はすぐに総合事務受付を見つけた。

「ええと、これで手続きは全て終了です。IS学園へようこそ、ファ凰
鈴音さん」

少女、鈴音は受付嬢の笑みを無視し、受付に身を乗り出すように身

体に乗せた。

「あの、織斑一夏って何組ですか？」

「ああ、あの噂の子？ 一組ね。鳳さんは二組だからお隣さんね。そういえば、もう一人の男のはクラス代表になれたのにそれを織斑君に譲ったんだって」

そんな噂に興味はない、とでも言いたげな表情で鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って決まってるんですか？」

「決まってるけど・・・聞いてどうするつもり？」

受付嬢の問いかけに鈴音は薄い笑みを浮かべた。その額にしっかりと血管を浮かび上がらせて。

「お願いしようと思って。友達を驚かせたいから、代表を譲って・・・」

「なにか、めんどくさいことが起きる予感」

「誰にいつてるんだ？霧人」

寮内である

「明日以降絶対面倒事が増える」

「何を根拠に？」

「勘？」

「なぜ疑問形なんだ？それに勘って」

相変わらず同居人は箒のままである
一夏は一人部屋らしい

「そういえば、霧人」

「どうした？」

「私の説明はいまいち理解できないのか？」

「だって擬音ばかりじゃん。箒は自分の感覚をストレートに言いすぎなんだよ」

「そうだったのか・・・」

「そういえば、シャワーあびたのか？俺の使用時間だが」

「あっ・・・忘れてた」

「やれやれ、先入れよ」

「すまん・・・覗くなよ？」

「のぞかねーよ」

よく考えれば一夏の部屋でシャワー浴びればいいんじゃない？俺というわけで一夏の部屋でシャワーを浴びて就寝しました

クラス代表決定戦（後書き）

こんな感じです

ありがとうございました

完成した『緑』（前書き）

今回はクラス代表戦の少し前から代表戦までです
今回ついに霧人の専用機が出てきます
どうぞ

完成した『緑』

「ねえ聞いた？二組に転校生が来たんだって」

「こんな時期に来るなんて少しおかしいよね」

女子たちが何やら騒がしく噂話をしている

「転校生ね」

「どんな奴だろうな？」

「一夏よりは強いだろうな」

「霧人さん？それは私より強いと言ってるのですか？」

「セシリアの場合、一夏は零落白夜のおかげで勝ったからな、普通に戦えばセシリアの方が強いだろ？」

「まあ、そうですけど」

何て話をしていると

「一夏、他のクラスの女子の事なんか気にしてる場合か？」

「箒、そりゃそうだけど」

「代表戦までそう時間がないのだぞ？」

「分かってるよ、それは」

箒が加わってきた、最近はこの四人でいることが多い

「でも、専用機持ちはうちと四組だけでしょ？」

「そうそう、なら楽勝だって」

うちの女子は楽観的だな、なんて考えてると

「その情報、古いよ」

いきなり、ドアの方から声が聞こえた

そちらを見ると背は低め、髪は茶でツインテールにしてる女子がいた

「二組の代表、さらに中国の代表候補の鳳鈴音^{ファンリンイン}あんた達一組に勝ち
は渡さないわ!!」

何てかっこつけて言い放った

「鈴？お前鈴か？」

「一夏、お前の知り合いか」

一夏は一瞬こつちを見てうなずきさっきの転校生に顔を戻す

「何やってんだお前、全然似合っていないぞ」

「なっ！うるさいわよ」

「おい！」

後ろ！後ろ！志村後ろ！

「なによ！」

スパアアン

「ち、千冬さん」

「ここでは、織斑先生と呼べ、もうショートの時間だ」

「は、はい。一夏後で待ってなさい」

やれやれ、面倒事の原因はあいつか

ちなみにその後の授業で、なぜかぼけーとしていたセシリアと箒が
織斑先生に叩かれていた

「お前のせいだぞ！一夏」

「そうですね！責任とってもらいますわよ」

「なんでだよ・・・」

「今日来た転校生の・・・鈴音だっけか？あいつの事だろうよ」

話しながら食堂に向かう

食堂に着くと

「待ってたわよ！一夏」

鈴音がラーメンを持って立っていた

「何してんだ鈴？ラーメン伸びるぞ」

「わ、分かってるわよ、まったく」

やれやれ、隣の二人が若干怖いんですけど

「一夏！そいつとはどんな関係だ！」

「そうですね！も、もしかして付き合っているんじゃないんですの！
？」

「えっ、べ、べつに」

「そうだよ、ただのセカンド幼馴染だよ」

「なに？セカンド幼馴染？」

聞きなれない単語でございますな、一夏殿

「箒は、ファーストだし、鈴は小四の時から仲だから」

「一夏、それは幼馴染じゃなくて友達だろうが」

一夏・・・お前の思考回路が良くわからん

「そういえば一夏、あんたクラス代表になったんでしょ」

「おう、成り行きだけだな」

「ならさ、私が教えてあげようか？」

「その必要はない（ですわ）」

「うるさいな、あんたら誰よ？」

「私は一夏の幼馴染の篠ノ之箒だ」

「私はイギリス代表候補のセシリア・オルコットですわ」

「だから？私は一夏に聞いているんだけど」

「うーん、鈴ありがたいんだけどもう間に合ってるんだ」

「そ、そう？一夏がそういうならいいけどさ」

・・・俺空気！！寂しいよこれマジ

「そっぴや、あんた誰？」

「うん？ああ、俺は雨裂霧人、見ての通り男だ」

「ふーんそう、あつもしかして一夏に教えてるのってあんた？」

「そうだが、それが？」

「ならさ、変わってよ」

「・・・クラス代表戦が終わるまでは敵だろ？敵に教えを乞わせるわけにはいかないな」

「・・・言っわね、あんた」

「いや、クラス代表戦後なら教えるの参加してもいいよって事だから」

「・・・そう、ならいいわよ」

俺と鈴音は少し不気味に笑う

その後俺は注文してた日替わりランチをものの数分で食べる

第三アリーナにて

「一夏、大分操作慣れてきたな」

「さすがにこんだけやってたらな」

「一夏」

鈴音の声が聞こえたのでそちらを見るとやはり、鈴音がいたしかも、専用機『甲龍』（シェンロン）に乗っている

「ここは関係者以外立り禁止だぞ！」

「わたし関係者だし」

筈が吠えるも鈴音はあっけらかんと言い返す
まあ確かに一夏の関係者だな

「それがあんたの専用機なのね分かったわ」

それだけ言つと鈴音は帰って行つた

「何がしたかったんだあいつは？」

「ISの見せ合いっこだろ」

「寮内にて」

「いつも誰に言ってるんだ？」

俺の呟きに筈は毎回対応する

「暇なのか？ 箒」

「なんでそうなる？」

「俺のどうでもいい呟きにツッコムんだから」

「こつちを向いて話すからだ」

気が付かなかった

「そういえば隣が騒がしいな」

「一夏の部屋だな」

よく耳をすます

「なんで約束覚えてないのよ！！」

「覚えてたろ！ なんでおこるんだよ」

「意味が違うのよ！ 意味が！」

あまりにうるさいので部屋から出て一夏のところに行こうとしたところいきなり鈴音が体当たりしてきて俺たちの部屋に入ってきた

「な、なんだ？ いきなり」

「いきなりすぎて俺にも分からん」

鈴音は泣いていた

とりあえず泣き止むまで待つことにしてお茶を淹れた

「・・・あれ？ なんであんなにがいの？」

「俺たちの部屋だが」

お茶を渡す

「あれ？おかしいな」

「気が動転してたんだろ」

「・・・なんで男女で相部屋なの？」

「知らないぞ、そんなこと、でもお前も同じことしようとしたんじゃないのか？」

「そうだけど」

「そういえば、約束がどうか言ってたが」

俺が言うと鈴音の肩がビクツと震えた

「私が中国に戻るときに言ったのよ、私の酢豚を毎日食べてくれる？って」

「告白したわけだ、で朴念仁の一夏はそれをおごってくれると勘違いしたと」

「そうよ」

そうなんだ後半適当なのに

「それで頭に来て逃げたと」

「そう・・・」

まったくあいつの鈍感さにはあきれるな

「めんどくさいのを好きになっただけ」

「そう思うわ」

話を聞いてもらえたからすっきりとした顔になった鈴音は

「ありがとう、私の事は鈴でいいわ」

と言つて戻つて行つた

「代表戦当日である」

「なんだ？それ」

一夏に突つ込まれました

「切り替えて、さあ一夏頑張つてこい！！」

「おう、いつてくるぜ」

一夏は気が付かなかったようだ

俺の手に付けてるグローブの色が『緑』であつたことを

「さあ鈴、張り切つて行こうぜ」

「そうね、ボツコボコにしてやるわよ」

「その前に、鈴、すまねえ」

「なあ何を急に」

「約束の事とかをな」

「いいわよ、分かつた、許してあげる」

「サンキュ、じゃあいくぜ！！」

俺は負けねえ、絶対に勝つてやる

霧人が言うには鈴のISには衝撃砲と呼ばれる武装があるらしい
こいつは相当強力で喰らうわけにはいかない

厄介なのは銃弾も銃身も見えないことだ

「いくわよ！一夏」

鈴は両肩の比固定浮遊部位を少し傾ける

アンチロックユニット

来る！！

俺は即座に右に回避行動をとる

その後さつき俺がいたところを風が通り過ぎる

「へえこれを躲すなんてやるじゃない、一夏」

「次はこっちの番だ」

俺は鈴からの攻撃を避けつつ距離を詰める

鈴は距離を詰められないように攻撃をするがセシリアとの訓練で回避行動はばっちりだ
いつきに距離を詰めた

「しまっ」

「もらった！！」

攻撃が当たる瞬間、アリーナが大きく揺れた

『なッなんだ！？』

全員が驚きの声を上げる

「山田先生！あの煙の中は？」

「今調べてます！」

緊張してるのか声が少し震えている
俺は、アリーナを凝視し続けている

すると煙からビームが一夏達に向けて放たれた

「何て出力のビームだ!？」

「あれは……IS?」

煙が晴れるとそこには二メートルほどの大きさの黒いISが立っていた

「織斑先生!俺たちに発進許可を！」

「無理だ、ロックがかかっている」

くそっ!あいつらだけで勝てるのか?

「なんなのよ?こいつは！」

「俺が知るかよ!？」

何だこいつは!?!いきなり出てきていきなり攻撃してきやがった

「一夏!なにぼけーとしてんのよ」

「わるい……?」

攻撃してこない?俺たちの会話を聞いているのか?あいつはしかも、こいつの動作は人間とは思えない

「なあ鈴、もしかしてだがあれって人乗ってないんじゃないかな」

「はあ?そんなわけないでしょ、ISは人がのつてないと動かないわよ」

「でもあの動きは人の動きとは思えない」

「確かにそうだけど」

なら、やりようがある

「鈴、あいつに向かつて衝撃砲を全力で撃ってくれ」

「あいつに効かないのに？」

「ああ、それでも構わない」

鈴が衝撃砲のチャージを始める

「いつでもいいわよって何してんのよ？」

「いいから、放て！」

鈴の前に移動し指示をだす

知らないわよと言って鈴は衝撃砲を放つ

その勢いに乗って俺は瞬間加速を使う

いつきに接近して零落白夜でISを思いつきり斬る

攻撃はISの右腕と体の一部を削ったが

ISは左手で俺を殴り飛ばした

「ぐわっ！」

「一夏！」

「大丈夫だ」

これで・・・

―警告、敵ISにロックを受けています―

「なっ！？」

ISの方を見ると極太のビームが迫っていた

「くっ」

突然の事に目を瞑ってしまった

「『秘技』千迅」

ビームを一気に切り裂き奴の左腕を斬撃で切り刻んだ

「・・・あれ？」

「無事か？一夏」

目の前に『緑』があつた

ISを見ると両腕がなくなり完璧に撃沈していた

「霧人・・・それは？」

俺の白式にそっくりでというか、色以外白式だ
色は薄い緑色である

「おれの本当の専用機、『緑式』（りよくしき）だ、お前の白式の
パクリだ」

「さっきの技は？」

「雨裂流『秘技』千迅、俺が開発した技だ」

「すげー威力」

「そりゃな、一閃の速さで刀を千回振るう技だ、木刀で鋼鉄斬ること
ができる」

「霧人の実力でだろ」

「というか、俺以外誰もできなかった」

何て話をしているうちに先生方が奴を回収していた

「結局なんだったんだか」
「ううむ、さっぱりだ」

次の日

「なんで鈴がここに？」

「霧人が代表戦後訓練参加していいって」

「霧人^{さん}！！」

「いいじゃないか、別に」

訓練に参加するぐらい

「鈴は中距離で尚且つパワータイプだから訓練させやすいんだよ」

「射撃なら私がいますのに」

「セシリアは遠距離だから回避ぐらいにしか役に立たないんだよ」

ぐらいしか・・・とセシリアは遠い目になってしまった

「近接なら私が！」

「確かにそうだけど近距離専用の機体なんてそうはいないからな」

「ぐっ」

「だからいいじゃないか、鈴が加わっても」

「よろしく」

二人は沈黙だった

「そういえば、霧人、お前のIS緑式の装備は？」

「見せてやろうか」

IS名 緑式

武装

日本刀

あまのむらぐものつぎ

天叢雲劍

レーザーライフル

やたのかがみ

八咫鏡

ソード&レーザービット

やさかにのまがたま

八尺瓊勾玉

「簡単に言えば全距離対応機だな」

「・・・すげーな」

「八咫鏡って言ったっけ？」

「ああ、ライフルだろ」

「名前の由来って？」

「装備を三種の神器に例えたときにそうなったただけだ」

「そっなんだ、なあ、この日本刀ってさ」

「俺の剣技に耐えられるようにしてある、前の近接ブレードなら千
迅は使えなかったからな」

「恐ろしいなホントに」

「さて、説明は程々に二対二の模擬戦をするか」

俺と鈴、一夏とセシリアでペアを組み模擬戦をした

結果は、一夏がセシリアの足を引っ張り俺たちの勝ち

次は、俺とセシリア、一夏と鈴のペア

ビットによるレーザーの嵐に手も足も出ずに一夏達敗北
最後に俺と一夏、セシリアと鈴のペア

「一夏！八尺瓊勾玉で攪乱させる、とどめをさせ」
「了解！」

「鈴さん！ああもう、じゃまですわ！」
「うっさいわね、あんたはビットでも出しておきなさいよ」

セシリア、鈴のペアは最悪でした相性が

「霧人、ほんとに強いな、全然勝てないよ」
「お前は近接だけだからな、俺は一閃から十閃さらに、千迅の斬撃を飛ばせるしな」

「でも、ほんとに霧人、あんた強いわね」

「なんであんなにビットを使いこなせるんですの？さらに操りながら移動や攻撃を出来るなんて」

「BT フレキシブル 偏光制御射撃は使えないけどな」

「寮「もういいぞ、それ」お早い突っ込みで」

止めよう、うんそうしよう

「そういえば、箒、あの答えまだ聞いてないが」
「・・・！」

あの様子じゃまだか？
でも最近の行動を見るに一夏の事をただの幼馴染として見ている気がする

「・・・」

「なに時化した顔してるんだ？」

「・・・ああ、羨ましいな・・・って」

「専用機が？」

「ああ、そうだ」

「姉に言えば作ってもらえるんじゃないか？」

「・・・そうなのだが・・・」

沈黙が続く

「切り替えよう、聞きたいことあるか？」

「・・・そうだな、姉さんとはいつ会ったんだ？」

「中一の夏だ」

「その時に？」

「打鉄とISのコアをな」

「なんでISに乗れる？」

「ISのコアあった人格に気に入られた」

「ISのコアの・・・人格？」

「そう、ISのコアの人格だ、初めて触った時にその人格と話をし
て気が合ってたな」

「名前とか・・・あるのか？」

「なかったから、二人でつけた、俺の名前をいじって、霧裂雨人つ
て決めた」

「雨と霧を変えただけか」

「ああ、それで同調して乗れるようになったわけだ」

「そうか・・・ありがとう」

「礼を言われることはしてない、お休み」

「ああ、おやすみ」

完成した『緑』（後書き）

こんな感じです

ありがとうございます

ついでに並行して書いているIS 天才以上完璧未満もよろしく

大騒動？いつもの事だ（前書き）

今回は普通の授業と転校生のお話
どうぞ

大騒動？いつもの事だ

ロッカールームにて

「なあ霧人」

「どうした？一夏」

次の授業がISの実習なため着替え中です

「このISスーツさ、着替え辛くねーか？」

「言えているな、毎朝、毎朝大変だよ」

「・・・毎朝？」

「ああ、ほら」

「制服の下に着てんのか」

「その方が楽だぜ」

「ふゝん、そうか」

「一夏、早くしないと遅れるぞ」

「わ、分かったよ」

ギリギリだったと言っておこう

俺はもたもたしていた一夏を結局おいてきた

一夏は結局出席簿アタックを受けていた

「今日は、専用機持ちで一対一対一をやってもらっ

ええゝめんどくさい

ブン！ バシっ！

「チっ！文句は受け付けんぞ！」
「なにも喋ってません！」

俺は出席簿を白刃どりで止めている
てか、舌打ちしたよ！？教師がそんなんでいいの？

「織斑、雨裂、オルコット、鳳。早くしろ」
「」「」「はい」「」

全員で展開して、浮上する

「雨裂君のISって、織斑君のと似てるよね」
「色と武装以外同じだもんね」
「静かに見てろ、お前ら」

織斑先生の一言でみんなが一斉に黙る

「霧人さん、今日こそ勝たせてもらいますわ」
「そうよ、あんたの無敗伝説ここで砕くわ」
「だてに訓練はしてないぜ、霧人」
「すでに・・・三対一が確定しているのはなぜだろう・・・」

泣きなくなってきたよ
いいのか？織斑先生？・・・え？構わない・・・
死亡フラグだよ・・・立ったよこれ

「貴様らに負ける気などしないわ！ふはははは！」
「」「自棄になった！？」「」

俺は、三種の神器を展開する

ちなみに八尺瓊勾玉は右肩、左肩に浮いているブースターの中と背中
中の腰あたりについている

普段はブースター替わりになっている、展開してもその下にブース
ターがついてるので機動力が下がることはない

右肩にある勾玉はレーザーライフル仕様で左肩にあるのはレーザー
ソード仕様、腰についてるのはシールドエネルギーを必要としない
シールド仕様なので防御面は完璧なのだ

ソード仕様は天叢雲剣に装着することで天叢雲剣の強度、切れ味を
あげることができる

俺に負けはない！！ふはははははは↑相当自棄

「げっ！いきなり全武装展開した!？」

「うそっ！そんな高度な技が出来るなんて!」

「自棄とは恐ろしいですわ!」

「いくぞ!!」

俺は一夏に狙いをつけて一気に接近する

「くそっ!」

「はああああ!」

俺は一夏と鏖迫り合いをしながらライフルビットをセシリアへと向
ける

鈴が衝撃砲が放ってくるがシールドビットは俺の千迅10回分耐え
られる代物だ、ちよつとやそつとじゃ壊れやしないぜ

俺は、ソードビットを天叢雲剣に装着する

「えっ？霧人、何だそれ？」

「見ての通り、刀にビットを装着しただけだぜ？」

「そんなこと出来んのかよ？」

「出来るからやってる」

いまだに少し茫然としている一夏を蹴飛ばす

俺のライフルビット六基に翻弄されているセシリアに近づく

「くっ！霧人さん！霧人さんは何でビットの扱いがここまで上手なんですの！？」

「イメージだ、イメージ」

天叢雲剣に装着したビット三基を外しセシリアに向ける

ソードビットに対応できずシールドエネルギーを削られたセシリアを思いつき蹴飛ばす

最後は、いまだにシールドビットに苦戦している鈴に近づく

「くっ！霧人！このビット何なのよ！」

「シールドビットだが？」

「違うわよ！分かってるわよそんなこと！何でこんなに固いのよ！」

「盾が脆かったら意味がないだろ」

「そうだけでも！」

「いいから、お前も落ちろ！！」

ライフルビットで動きを止めさせソードビットで青龍刀を無効化して蹴飛ばす

三人とも同じ場所に吹き飛ば

そう、地面に一夏が下で鈴が一番上のサンドイッチ状態になった

「ふん！三人で来るからそうなる」

「雨裂・・・やりすぎだ・・・」

織斑先生はあきれていた

「いたたた」

「霧人、容赦なさすぎ」

「だから、お前らが悪い」

食堂で三人から非難の声が上がったがあれはこいつらが悪い

「俺はむしろ被害者だ、なあ箒？」

「うん？・・・ああそうだな」

「箒さん！裏切りましたわね！」

「いや・・・裏切ったも何もないだろう」

箒に同感だ

寮内

「ふむ、こんなところか」

「ありがとうな、霧人」

箒に勉強を教え終わったところだ

「しかし、霧人は相変わらず頭がいいな」

「まあね、義母さんから勉強は欠かすなと言われてるから」

「なあ霧人」

「どうした？真剣な顔をして」

「お前の両親はあの白騎士事件で死んだとニュースであつたよな」

「・・・ああ、そうだな」

箒は俺と反対側を向いて話しているからどんな表情かは見てとれない

「私は白騎士を開発した・・・」

「その先は言わなくてもいい、お前が誰の妹だろうと関係はない」
「・・・だが」

「お前がISを開発したわけではない、お前が母さんたちを殺したわけではない」
「・・・」

うつむいていた顔を箒は上げたがこっちは相変わらず向かなかった

「それに俺は束さんからの謝罪も受けたしな」

「・・・いつだ？」

「ようやくこっち向いたな」

「・・・」

「事件の次の日、病院でな」

「・・・それで？」

「・・・許したよ」

「!・・・なんで・・・なんで許せる!!」

「・・・最初は許せなかった、親殺しとして謝罪だけで済むものか
と思ったよ」

「だったらなぜ!!」

「避難区域にもかかわらずあの場所にいた俺たちも悪かった、それ
に向こうも殺す気があったわけではなかったわけだしな」

俺は箒を見る、箒は怒りと驚きの表情をしていた

「ただ運がなかった、俺はその時の束さんの顔を見たらなぜかそう
思ってしまった」

「・・・なぜ・・・？」

「わからない・・・俺はそれが今でもわからない」

箒は若干納得できない顔をしていた

「そつえば、箒お前は束さんの事どう思ってるんだ？」
「・・・!!」

箒は聞かれたくないことを聞かれたを言わんばかりに顔を歪めた

「・・・あの人はいつも身勝手だ」

「言えてるな」

「勝手にISを造って勝手に事件起こして、勝手にいなくなる」
「・・・」

俺はただ箒の言葉に耳を傾けていた

「私たちは、勝手に重要保護プログラムなんてもん勝手に決めて日本中転々と移動させられ

そのうちに母さんの心は壊れてしまった！」

「・・・」

箒は過去を思い出したのか、声が涙ぐんできた

「それにこの学園に来たのもあの人の妹と言っただけでだ！」

箒は泣き始めてしまった

「あの人の・・・あの人のせいで・・・私たちの人生は滅茶苦茶だ
!!」

俺は叫んだ箒を抱きしめた

「・・・！？霧人？」

「・・・それでも、お前の大切な家族じゃないのか、確かに、人生が変わったかもしれない、つらい目にもあったかもしれない。それでもお前と血のつながった姉妹だろ？」

俺は、箒の頭をなでる

「・・・ちなみになぜこんなことしてるんだろうと心の中で思い顔は真っ赤だ

「それに・・・これはお前たちに失礼かもしれんが、重要保護プログラムのおかげで俺は箒に会えた」

箒の肩が一瞬ビクッと動く

「・・・」

俺は何をしゃべっていいのか分からなくなり、箒をただ抱きしめて、頭を撫でていた

「・・・ありがとう」

「・・・おう、・・・すまん」

「あやまるな」

「そうか」

・・・会話が続かない！！恥ずかしい！さっきの事が

「・・・ねよう」

「そうだな」

俺はすぐさま布団をかぶり、眠りについた

「・・・ありがとう、霧人」

箒の呟きは箒にしか聞こえてなかった

次の日

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「は・・・？」

「「えええええっ！？」「」」

いきなりの転校生紹介にクラクラス中が一気にざわつく

それも仕方ないだろう。この時期に、鈴のときだって騒がれたのに、また転校生だ

つか、何故二人も？分散させろよ

「失礼します」

「・・・・・・」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきが止まるでも仕方ない

だって、そのうちの一人が

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

男子だったからだ

「お、男・・・？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

——」

うーん？なんだろう、動作が・・・変だ、男らしくない

「きゃ・・・」

「はい？」

「きゃあああああ——っ！」

女子の歓喜の叫びが響きわたる

危なかった。耳を塞いでなかったら鼓膜が破れてたんじゃないか？

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「地球に生まれて良かった～～～！」

やかましいから黙れ

他のクラスの迷惑だろうが

「黙れ、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生の一言で一気に静かになる

静かになったところで今度は沈黙が広がる

全員の視線はもう一人の転校生に向けられている

沈黙の理由はそれだけではない

その転校生の雰囲気はかなり重い

身長はデュノアと比べてかなり差があるが全身から放つ冷たく鋭い

気配がまるで同じ背丈であるかのように見えてしまう

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんの言葉は素直に聞く転校生
教官？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」
「了解しました」

どうやら、千冬さんはあの転校生と知り合いみたいだな
転校生はこちらを向き――

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

――の一言だった

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

できる限り笑顔でボーデヴィツヒに聞く山田先生だが、その一言に
撃沈

「！貴様が――」

ん？ボーデヴィツヒがつかつかと一夏に向かって行くぞ？

バシンッ！　ちなみにこの音は俺が転校生の腕を止めた音だ

「・・・何をする？」

「それはこちらのセリフだな、いきなり人をたたこうとするとは」

いきなりだった。しかも無駄のない平手打ち。だが、なんとなく敵意を感じたため先に行動した

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

さっきまで黙っていたのが嘘のように一夏に罵倒している
さすがの俺もこれにはかなり驚いた

「いきなり何しやがる！」

思考が回復した一夏はボーデヴィツヒに文句を言う

「ふん・・・」

ボーデヴィツヒは何事もなかったかのように一夏の前から立ち去って空いている席に座ってしまう

「まったく貴様らは・・・ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

・・・いや織斑先生どう考えても貴方がらみの問題だったでしょうに

「おい織斑、雨裂。デュノアの面倒を見てやれ」

了解しましたよ

「君たちが織斑君と雨裂君？初めまして。僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから・
・っ霧人！なんで先に行こうとしてんだよ！」

ちっ！バレたか

「なにしてる早く来い」

「ええ、俺が悪いのか？」

と文句を言いながらデュノアと一緒に走ってくる一夏

「とりあえず男子は空いているアリーナ更衣室で着替え。これから
実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん・・・」

「一夏、とりあえず手を放してやれ。それじゃあ階段で転ぶぞ」

階段を見えた辺りから一夏にそう言う

本当に転ばれたら面倒だし、速度も落ちる

それだけは避けたい。なぜなら――

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君、雨裂と一緒に！」

そう、HRが終わったからだ

こいつらに捕まったら最後、質問攻めのおかげく授業に遅刻、鬼教師
の特別カリキュラムが待っている。一度経験したからな・・・それ
だけは絶対に嫌だ

「いたっ！こつちよ！」

「者共！出会え出会えい！」

くそっ、いつもよりしつこいんじゃないか？
つか、さっきよりも増えてるし

「織斑君や雨裂君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」
「しかも瞳はエメラルド！」

「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は
河原の花以外のをあげるね！」

なんで河原？そっちの方が面倒くさいだろ
っ！かもつといいもん買ってやれよ

「な、なに？何でみんな騒いでいるの？」

「・・・男子が俺たちだからだろ」

「・・・・・・・・？」

俺の言葉に首を傾げるデュノア

「いや、普通に珍しいだろ。IS操縦できる男って、今のところ俺
たちしかいないんだろ？」

「あっ！——ああ、うん。そうだね」

「それとアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないか
らウーパールーパー状態なんだよ」

「ウー・・・何？」

「おい、そんな古くてくだらない例えしないで早く走れ。追いつ
かれるぞ」

「古くてくだらないってウーパールーパーに謝るんだ、霧人！」

知るか

例えを出したお前が謝りやがれ

「あはは♪二人とも仲良いね♪」

「そりゃどうも」

「しかしまあ助かったよ」

「何が？」

「いや、やっぱり学園に男二人はつらいからな。何かと気を遣うし。

もう一人でも男が増えるっていうのは心強いもんだ」

「そうなの？」

俺に聞くな

「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「俺は雨裂霧人。霧人でいいわ」

「うん。よろしく一夏、霧人。僕のことシャルルでいいよ」

「とりあえず速度をあげよう、女子から逃げるぞ！」

ロツカールームにて

「「はあはあ」」

「シャルルはともかく一夏、情けないぞ」

一夏とシャルルは息を荒げている

「霧人はつていつの間に着替えてるんだ！」

「逃げる際にこっそり着替えた」

「ええ〜」

「さつさと着替えるよ、二人とも」

「ああ」

「う、うん」

一夏が着替えだす

「わあっ!？」

「？」

いきなり、シャルルが変な声を出す

「荷物でも忘れたのか? って、なんで着替えないんだ? 早く着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあうるさい人で——」

「一夏はそれでよく怒られてっからな」

「うるせえやい。ちょっと遅くなっちまうんだ」

いや、その理由はなんなんだよ?

「ほら、シャルルも早く着替える」

「う、うんっ! き、着替えるよ? でも、その、あっち向いてて……ね?」

「???? いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない! 別に見てないよ!？」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならない——
というか、あの人はシャレにしてくれんぞ」

経験者は多くを語るってか？

「・・・・・・・・・・」

一夏が着替え出して数秒

何故か視線を感じる

ちなみに俺は一夏の方を向いている

「シャルル？」

「な、何かな！？」

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや、別に・・・・って一夏まだ着てないの？」

一夏はまだISスーツのズボンしか着ていない

「これ、着るときに裸ってというのがなんか着づらいんだよなあ。引つかかって」

「ひ、引つかかって？」

「おう」

「・・・・・・・・／／／／」

「よし、シャルル。さっさと行くぞ。一夏を置いて」

「えっ！？ちよつと！？」

俺はシャルルを連れて先に更衣室を出た

「まったく、一夏の奴。なんであんな下品なことを平気で言っかな」

そんな話、誰も興味ねえっての

「シャルルも嫌だったら厳しく言ってもいいんだぞ」

「う、うん」

「そういえばそのスーツ、見たことないな」

「これはデュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

「デュノア？デュノアって・・・」

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う」

「ほー。そうなんだ」

「う、うん」

「?どうした?」

「いや、ちよつと驚いちゃって」

何が?俺、変なこと言った?

「ううん。大半の人はその話を聞いて驚いたり、凄いなって誉めてきたりするんだけど」

ああ、なるほど

「まあ、確かに驚くし、凄いと言えば凄いが、シャルルが社長って訳じゃないしな」

「そ、そうだね」

「だが・・・一応シャルルのことはいろいろと知りたいがな」

「あ、ありがとう・・・」

うん。ちよつとは元気になったみたいだ

会社の話をしているシャルルは顔が暗くなったように見えたからな。
この話は禁止だ

「おおーい！霧人、シャルル！」

「うし、早く行くぞ」

「う、うん」

一夏の声が聞こえた瞬間、俺とシャルルは走り出した

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

俺とシャルルが一組整列の端に加わると隣にいたセシリアにそんなことを言われた

ちなみに一夏は千冬さんに怒られている

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

何故かセシリアの喋り方に棘がある

「一夏のせいだな」

「う、うん」

「あら、そうでしたの？」

シャルルの肯定もあつたおかげかセシリアはすぐに納得してくれた

「そういえば、一夏さんはどうしてあの女性に叩かれようとしたのかしら？」

「いや、わからん」

「なに？一夏はまたなんかやったの？」

後ろを振り向いたら鈴がいた

ああ、後ろは二組の列だから当たり前か

「一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれそうになりましたの」
「はあ？アイツはなんでそうバカなの？」

「——安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

ギギギギッ

ときしむブリキの音で首を動かすセシリアと鈴

バシーン！

そして容赦なく出席簿アタックが響いた
可愛そうに

「では、格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
「はい！」

一組と二組の合同実習なので人数はかなりの人数がいる
出てくる返事もいつも以上に気合いが入っていやがる

「くうつ・・・何かというとすぐにポンポンと人の頭を・・・」
「・・・一夏のせい一夏のせい一夏のせい・・・」

叩かれた場所が痛むのか、セシリアと鈴はちよつと涙目になりながら頭を押さえている

セシリアはともかく、鈴は完全に八つ当たりだ

「そんなに痛いのか？」

「痛いわよ！アンタ喰らったことないの？」

「条件反射で防いじゃうんだよね」

「お前たちには戦闘を実演してもらう。さっさと準備をしろ」

「ど、どうしてわたくしたちが!？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ」

「うつ・・・」

「お前ら少しやる気を出せ。——アイツに良いところを見せられるぞ?」

なんか最後の方、二人にしか聞こえないように喋っていたが、なんだ?

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せる良い機会よね!専用機持ちの!」

一体なにを言われたんだよ?

やる気MAXになっついていやがる

「それで、相手はどちらに?わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

・・・おう?上から音が・・・

つてISがおつてきたー!

一夏の上に

「あ、あのう、織斑くん・・・ひゃんっ!」

「ん?この声は・・・」

聞き覚えのある声に俺は近づいて見てみる

すると、何故か一夏がISを展開した山田先生を押し倒した体勢に

なっていた

「そ、その、ですね。困ります・・・こんなこと・・・」

「・・・えっ？いや、これは・・・」

「今すぐどこかを推奨するなおれは」

俺の後ろから一夏めがけてレーザーが通る

「ぬおっ！」

「あら・・・外してしまいましたわ」

「セシリア、落ち着け」

しばらくお待ちください

「さて、小娘ども。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、と言われたのが気に障ったのか、セシリアと鈴はその瞳に闘志ををたぎらせている

つつか、もつと言い方がなかったんだろうか？

今のお前たちでは相手にならん、とか・・・一緒か

「では、はじめ！」

号令と同時にISを展開したセシリアと鈴が飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た

「手加減はしませんわ!」

「ソッコーで終わらせるわ!」

「い、行きます!」

いつもの山田先生じゃないな。目が鋭く冷静なものに変わっている

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせろ」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明を始めた

だが、シャルルには悪いが俺は戦闘の方を集中する

先制はセシリア・鈴だったが、山田先生は軽く回避した

そして山田先生の反撃が始まった

両手に持っている五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》が二人を襲う

命中精度が高く二人に確実に当たっている

セシリアもビットで反撃するが避けられ、鈴の弾雨の衝撃砲も避けられる

そして、山田先生の射撃がセシリアを誘導させ、鈴とぶつからせたところでグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中から二つの影が地面に落下した

「くっ、うつ・・・まさかこのわたくしが・・・」

「あ、アンタねえ・・・何面白いように回避先読まれてんの・・・」

「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐつ・・・！」

「ぎぎぎぎつ・・・！」

「どんだけ仲悪いんだよ、お前らは
ほら、他の奴らもくだらないがみ合いにくすくす笑いが起こってるぞ

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。
以後は敬意を持って接するように」

確かにこれで山田先生の見目が変わるだろうな

「専用機持ちは織斑、雨裂、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。それぞれグループで実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

織斑先生が言い終わるや否や、一夏とシャルルと俺に一気にニクラス分の女子が詰め寄っていく

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて」

「デュノア君の操縦技術見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいらて！」

「雨裂君！お願いします」

「楽しみ」

「この馬鹿者どもが・・・出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

その一声に、それまでわらわらとアリのよう群がっていた女子達は、蜘蛛の子を散らすごとく移動して、それぞれの専用機持ちグループは二分とかからず出来上がった

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

ふつとため息を漏らす千冬さん。お疲れさまです

「・・・やったあ。織斑君と同じ班つ。名字のおかげねっ・・・」

「・・・うー、セシリアかぁ・・・さっきボロ負けしてたし。はぁ・・・」

「・・・鳳さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ・・・」

「・・・デュノア君！わからないことがあつたら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！・・・」

「・・・」

と、織斑先生にバレないようにしながら、各班の女子はぼそぼそおしゃべりしていた

まあ、ドイツ転校生ラウラ・ボーデヴィツヒの班はまったくない――

つつか、改めてボーデヴィツヒを見てみると、張り詰めた雰囲気。人とのコミュニケーションを拒むオーラ。俺たち生徒への軽視を込めた冷たい眼差し。さっきから一度も開くことない口

なんかこいつを見ているとムカついてくる理由はわからないが

他の女子はみんなちよつとうつむき加減で押し黙っている

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄^{うちがね}』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生がそう言うのとボーデヴィツヒのグループ以外は一斉に動き出す

すげー気まずそう

昼休み

俺たちは屋上にいた

一夏が屋上で昼食を食べようと誘ってきたのだ。もちろん、箒やセシリア、鈴のいつものメンバーとシャルルも一緒だ

「あのー僕もいていいの？」

「何の問題もないだろ」

「そうだな」

俺はそう言っただけで弁当を取り出す

「あれ霧人？弁当作るの？」

「作るよ、趣味に料理あるしな」

「そっすいえば言ってたな」

「そ、そっすいえば箒。俺の分の弁当を持ってきてくれたんだろ？」

「あ、ああ・・・」

箒は一夏に弁当を差し出す

「じゃあ、早速。・・・おお！」

弁当を開けると一夏が驚く

「これは凄いな！どれも手が込んでそうだ」

「確かに凄いな。朝早くから頑張ってた甲斐があったな」

「な！霧人！」

「ああ、すまん」

俺が弁当を作りに来たらすでに箒が弁当を作っていた。弁当を作っているとき、かなり奮闘していて終わるまで俺の存在に気づかなかったんだよな

誰の分を作っていたのかと思っていたが、一夏のために作ってたんだな

「箒、なんでそっちに唐揚げがないんだ？」

「！こ、これは、だな。ええと・・・」

答えられねえよな。成功したのが、それ（一夏の分）だけだなんてな

「わ、私はダイエット中なのだ！だから、一品減らしたのだ。文句があるか？」

「文句はないが・・・別に太ってないだろ」

「一夏。ダイエットは別に太っているからするものだけではないんだぞ。美容や健康のためにすることもある」

「その通りよ。何であんたはダイエット＝太っているの構図なのかしらね」

「まったくですわ。デリカシーに欠けますわね」

「いやでも実際ダイエツトなんか必要ないように見え——」

隣にいる箒を見ようとする一夏だが、顔を思いっきり手で押し返される

「ど、どこを見ている、どこを！」

「どこって・・・体だろ」

「いやダメだろ」

その言い方は完全にアウトだ

「コホン。さて与太話はこのくらいにして昼食にしよう。いつまでも談笑していられるほど昼休みは長くはない」

「じゃあまあ、いただきます」

唐揚げをほおばる一夏

「おお、美味い！箒は本当に食べなくていいのか？」

「・・・失敗した方は全部自分で食べたからな・・・」

ちなみに俺も食べさせられたよ

ほとんどが真つ黒に焦げていたものをな

上手かったけど

「本当に美味いから箒も食べてみるよ。ほら」

そう言って一夏は唐揚げを女子の一口サイズに切って、箸で持ち上げる

「な、なに？」

「ほら。食ってみろって」

「い、いや、その、だな・・・」

箒はかなり動揺している。まあこれは仕方ないだろう

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？」

「そうだな。一夏はまったく意識していないみたいだな。大した奴だよ」

納得したように微笑むシャルルに俺も賛同する

「さてと美味しくいただくかな」

二人をほっぽって飯を食う

「妬いてるの？」

ギロ！！

「なんでもないわ」

ふん

「一夏！はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「一夏さん！サンドイッチもどうぞ！一つといわずにどうぞ全部！」

ずずいっと鈴とセシリアが押し寄せている
しかも、かなりの気迫だ

「「さあ！」」

二人とも一夏に料理を差し出している

「一夏、ご愁傷様」

「え？なんで？」

「セシリアの料理はな、必ず変なものが入ってるんだ」

一夏を見ると、とても変な顔をしていた

寮内

「・・・・・・」

「霧人？」

「なんだ？」

「ずっと不機嫌だが・・・・」

「気にする必要はない」

「いや、気になるのだが」

まあもういいか

「そうだ、箒、明日俺に弁当作ってくれ」

「唐突だな、・・・・いいぞ」

「・・・・そうか、楽しみにしてるぞ」

俺は箒の逆を向いて寝た

恥ずかしいな！！おい

大騒動？いつもの事だ（後書き）

こんな感じです

ありがとうございました

学年別トーナメント前だったのに騒ぎやがって（前書き）

今回は学年別トーナメントに行く少し前の騒動の話です
どうぞ

学年別トーナメント前だったのに騒ぎやがって

授業中

「・・・・・・・・」

何このだんまり・・・原因はボーデヴィツヒの妙な威圧感です
何だよまったくこれじゃおちおち眠れもしねえ

ブン！ バシィ！

「真面目に勉強している生徒をいきなり出席簿で叩こうとするなんて！！」

「たとえ表面上真面目でも心で下らないこと考えていただろ」

「誤解です、考えてませんよーいやだなーはははは」

「・・・（雨裂君、なんでこの雰囲気であんなに喋れるんだろう・・・）」

女子からそんな感じの声が聞こえたような気がするがまあ気のせい
だろう

休み時間

「いやー暗かったねー授業が」

「霧人、なんでそんなテンション高いんだ？」

「うん？まあ人にはテンションが高い日と低い日があるんだよ」

「いや、そうかもしれないけど・・・」

まああの雰囲気ではテンションが上がるわけないよな

しかし、箸の弁当かゝたのしみだなゝ

「霧人、ずいぶん嬉しそうだね」

「シャルルか、まあ気にすんな」

「いや気になるから」

さてテンション戻すか

「しかし、ボーデヴィツヒの奴はクラスの雰囲気破壊するために来たのかって言うぐらいだったな」

「急に戻ったな・・・しかし、ほんとにそうだな」

「一夏は叩かれそうになったしね」

「・・・おお、一夏その時のお礼まだだぞ」

「え？・・・わかったよ」

「明日の昼おごるで決定」

「選択肢なし!？」

「ああ、ない」

そんな俺たちのやり取りを見てシャルルは小さく笑っていた
何かしぐさが女子っぽいよなシャルルって

そっぴいや昨日の夜具合が悪いとかなんとか言ってたけど・・・
実は全部聞こえちゃってたんだよねゝ一夏達の会話

さつきは女子っぽいって言ったけどほんとに女子だからなゝ

一夏のやつラッキースケベ連発だな

三年間で考えるって言ってたけどどうすんだろ？ホント
しょうがない、少し手伝ってやるか

ちなみにその後の授業も何とも言えない空気に包まれていた

放課後ゝ

「鈴も随分気合入ってるな」

「当たり前でしょ、優勝して一夏と付き合っただから」

「よくも付き合えると堂々と言えるな」

そう、鈴は一夏に学年別トーナメントで優勝したら付き合ってほしいと宣言したらしい

一夏は軽く承諾したらしいが・・・それって

「一夏のやつ絶対勘違いしてるよな」

「・・・多分ね」

「まあ、買物だとしてもデートになるわけだし」

「おお、そんな手があるなんて！」

いや、気が付いてなかったんかい

しかしなぜかその宣言が変に広まってしまい

学年別トーナメントで優勝したら一夏、俺、シャルルの誰かと付き合えるというものになってしまっているようだ

「俺や一夏、シャルルが優勝したらどうなるんだろうな？」

「一夏は可能性薄いけどあんたらはやりかねないよね」

「まあ、本人の意思だから大した問題にはならないだろう」

そうでありたい

「「あつ」

「ん？どうした？」

アリーナに着くと

「なんであんたがいんのよ！セシリア」

「それはこちらのセリフですわ！鈴さん」

「いや、訓練のためでしょ二人とも」

セシリアが入念にビットを操作していた

「霧人さんはどうして？」

「鈴の訓練と自分の訓練をかねてな」

「そうだ、一対一やりましょうよ」

「そうですね、それが三人のためになりますし」

「この前みたいなことにはならないことを願うよ」

三人ともISを展開し開始すると言ったところで
目の前にいきなり銃弾が飛んできた

「ふん、それがブルー・ティアーズと甲龍、それに緑式か。緑式は
ともかく前の二つはデータの方が強そうだな」

「何あんた、いきなり。殴ってくださいって言うてるの？」

「鈴さん、知能の低い猿に何を言っても無駄ですわ」

さすがに言いすぎなんじゃない？

「ふん、たった一人の種馬を奪い合う屑どもがつけ上がるなよ」

「セシリア、あいつ今どうぞ好きなだけ殴って下さいって言ったわ
よね？」

「そうですね、ここにいない人の侮辱など！！」

「ふん、貴様らごときクズなど話にならん」

「霧人さんは見ていて下さい、私たち二人で充分ですわ」

そう言って三人は戦い始めた・・・俺空気が過ぎ（涙）

ボーデヴィツヒのISはシュヴァルツェア・レーゲン

武装はワイヤーブレードとレールカノン、プラズマ手刀に・・・AIC？

ああ、アクティブ・イナードナル・キャンセラーか

慣性停止結界、対象を任意に停止させることができ、1対1では反則的な効果を發揮するが、使用には多量の集中力が必要であり、複数相手やエネルギー兵器には効果が薄いのだが

あの二人には敵しいな

あの二人が完璧に連携をすればはつきり言つてすぐにけりはつきそ
うだが

ボーデヴィツヒの操縦技術の高さで二人はむしろやられている
これ以上は危険だな

「この程度か、やはりクズはクズだな」

「なにを！！」

「まだまだ、これからですわ！！」

しかし二人はワイヤーブレードに捕まり振り回され同じ方向へ投げ
飛ばされる

「「きゃああ！」」

「くらえ」

「やらせるかよ！」

ボーデヴィツヒがレールカノンを構えたが俺はすぐに二人の前に移動して八咫鏡をボーデヴィツヒにはなつ

「くっ！」

とつさにボーデヴィツヒはかわして距離をとつた

「霧人、べ、別にあんたが出なくても勝てるわよ」

「無理だな、AICの弱点に気が付いてないお前らでは」

「そんなことありませんわ、まだ行けます」

「ここで無理すれば出れるトーナメントも出れなくなるぞ？」

「「うつ・・・」」

「下がってる」

二人は大人しく下がって行った

「さて、待たせて悪かったな」

「ふん、いいのか？一人で」

「ふゝ、自分はレベルが違うと、俺たちよりもはるか上の存在だと
そう言いたいのか？」

「貴様らごときが何人いようと私には勝てない」

「・・・くだらねえ、織斑先生からお前はいつたい何を教えてもら
ったんだ？」

「なんだと・・・？」

ボーデヴィツヒから殺気があふれるが気にせず続ける

「お前が教官と呼んで敬愛している織斑先生から軍でいつたい何教
わったんだって言ってるんだよ。ただの暴力か？」

「圧倒的な強さだ」

「ほづ、だかなお前はそれをはき違えている！」

「なんだと！！」

「貴様は力に溺れて織斑先生の教えたことすら覚えていない『出来
損ない』だ！！」

「黙れええええええ！！」

ボーデヴィツヒはワイヤーブレードを飛ばしてきたが軌道は単純
あっさり躲して天叢雲剣を展開してボーデヴィツヒに切りかかる
ボーデヴィツヒはプラズマ手刀でこちらの攻撃を防ぐが俺は間をお
かずに切り続ける

さらにソードビットを展開して全方向攻撃をかける

「ぐっ！なんだこの速さは！？」

「その程度か？織斑先生から教わっておきながら？」

「貴様っ！！」

ボーデヴィツヒが左手をこちらに向ける

AICを発動させたが俺は瞬時加速をつかい後ろに下がる
その後再び瞬時加速をつかいボーデヴィツヒの背後に回る

「ばかな！？」

「隙だらけだな！！」

天叢雲剣にソードビットを装着してボーデヴィツヒを切りつける

「ぐっ！くそ！」

ボーデヴィツヒはワイヤーブレードを飛ばしてくるが相変わらず動
きが単調だ

「『絶刀』六閃」

斬撃を六つとばしワイヤーブレードをすべて叩ききった

「ばかな！」

「これで！！！」

とどめを刺そうとしたが

「貴様らいいかげんにしろ!!」

織斑先生が怒鳴り声をあげた

「おっと、織斑先生か・・・命拾いしたな」
「・・・」

ボーデヴィツヒは俺を一睨みすると何も言わず降りて行った
俺もゆっくりと降りる

「貴様らは・・・まったく」

「友達がやられているのをただ見ていると？」

「そうは言わないがやり過ぎだ二人とも、決着は学年別トーナメントでつける」

「はい」

「では、それまで、私闘は禁止する、全員速やかに教室に帰れ」

織斑先生は手を叩く、静まり返っていたこの場に大きな音が響き、戦いに見とれていたのか呆けていた女子たちが我に返り大急ぎで帰って行った

保健室

「霧人が乱入しなくても勝てたのに」
「包帯姿でよく言う」

鈴とセシリアは包帯を腕に巻いている

「包帯は腕だけですわ、それにこの程度」

「はいはい、そうですか」

俺が早めに乱入したからその程度で済んでたのにふてぶてしい奴らだな

そんなにボロボロの姿を一夏に見られたのが恥ずかしいか

「二人とも・・・それだけで済んだだからむしろ霧人に感謝しないとダメだよ？」

「うっさいわね、シャルル、だから助けてもらう必要なんてなかったって言うてるでしょ」

頑固だなこいつら

一夏達が不毛な言い合いをしているのを見ると別な音が聞こえてきた

「なんだ？」

ドドドドドドドドドドド

走ってくる音だなここに

・・・ここに？

そして保健室のドアが吹っ飛んだ・・・間違いなく吹っ飛んだ

「」「」「」「織斑君！雨裂君！デュノア君！」「」「」「」

「なにこれ？」

ドアから伸びる腕、腕、腕

どこぞのホラーか？

「……これ!!」「……」

「なになに『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』——」

「ああ、そこまでいいから!とにかくっ!」

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、デユノア君!」

「私と組もうよ、雨裂君!」

「え、えっと……」

シャルルの方を見ると、数秒間だけ困惑した表情で一夏を見たのがわかった。そして一夏と視線が合うと、助けを求めているのがわかってしまうと思ったのだろっ、すぐに視線をそらしてしまった

それを見て一夏はわあわあと騒ぐ女子全員に聞こえるように大きな声で宣言した

「悪いな。俺はシャルルと組むことにしたから諦めてくれ!」

「俺は筭と組むぞ」

間髪入れず俺も宣言する

「……ええ……」

「でもしょうがないか……」

「篠ノ之さん……羨ましいな」

女子たちはとぼとぼと歩いて行った

「「一夏^{さん}!!」」

「私と組みなさいよ! 幼馴染でしょ」

「いいえ! 私と組んで下さい! クラスメイトですし!」

「えつと〜・・・うんと〜」

「お前ら勝率下げたいのか?」

「どういうことよ霧人?」

「一夏と相性が一番いいのはシャルルだ、お前らの場合一夏の動きに合わせる事がそう簡単にできないからな」

「「そんなこと・・・」」

「それにもし一夏と組んで負けた場合どうするんだ? こいつは燃費の事なんてあまり考えてないからすぐガス欠になって二対一の出来上がりだ」

「ぐぬぬぬぬ」

「いいかせません・・・」

勝利! V ぶいぶい V

「お前らはお前らで組め」

「気に入らないけどそうするしかないのね」

「ええ、仕方なく」

こいつら言葉で簡単に勝てるな

「さて、箒と話しつけてくるわ」

「おう、じゃあな」

「「霧人^{さん}」」

「ん?」

「「ありがとう」」

小声だったけどしつかりと聞こえた

「おう、早くよくなれよ」

寮内

「というわけで学年別トーナメント一緒に出るぞ」

「ああ、私もお願いしようと思っていたところだ」

「一夏じゃなくて、おれにか？」

「ああ、おまえにだ」

「なんで？」

「・・・一夏はまた厄介なことになりそうだったからだ」

「そうか」

顔ではポーカーク気取ってるが内心踊っています

俺＞一夏になっているのか？

うれしすぎるぜ～～～

「なら、あしたから連携の訓練するか」

「そうだな」

「俺ちよつと用事あるから」

「そうか、なら行って来い」

「おう」

一夏達の部屋

「どんだんだん」

「霧人か？口で言わなくてもいいだろ」
「誰が来たかすぐにわかるだろ？」
「ああ、ちよつと待ってくれ」
「だが断る」

ガチャ

「おい！！」
「うるさいな、見られたくない光景でもあるのかよ？」
「いや、ない・・・いやある？」
「なんで疑問形なんだ、まあいい、シャルルはいるか？」
「ああいるけど」
「話がある」
「そうか、でも今は・・・」
「男装をしていない・・・か？」
「え・・・？なんでそれを？」
「昨日のお前らの会話がまる聞こえでな」
「そうなのか」

一夏はすんなり通してくれた

「よお、シャルル」
「む、霧人」
「あわてなくていいさ」
「何とも思わないの？昨日の会話を聞いていたなら」
「だって、ISのデータ盗んでないだろ？」
「そうだけど」
「ほいつ」

俺は手に持っていたUSBメモリをシャルルに渡す

「これは・・・？」

「俺が中二の頃に考えてた第三世代機の設計図」

「ええっ！」

一夏もシャルルも相当驚いていた

「それなら、別にもういらないから、それを社長にくれてもうあなたの指図は受けないって言ってやれ」

「ほんとにいいの・・・？」

「じゃなきゃ渡したりはしない」

「なんで？僕は・・・」

「友達助けるのに理由があるか？」

「え？」

「困ってたら理由が何であれ助けるのが友達だろ？」

俺は笑顔100%で答える

「ふふっ、ありがとう」

シャルルは泣き出してしまった
あとは一夏に任せるとしよう

「じゃ、おやすみ」

「お、おう」

これでシャルルの枷が外れただろう

学年別トーナメント前だったのに騒ぎやがって（後書き）

「作者と」

「霧人の」

「「雑談コーナー！」」

パチパチパチ

「なにこれ？」

「雑談コーナー」

「いや知ってるけど、急に何？」

「面白いかなって」

「もうあきらめるよ」

「それがいい、作者は神ですから」

ぽかっ！！

「調子のり過ぎました」

「わかればよろしい」

「ホントによかったの？USBメモリわたして」

「おう、あたぼうよ」

「かつこいいな、おい」

「それでも、シャルルにフラグはたてないんだな」

「君ハーレム造りたいの？」

「いやです」

「でしょ？だから」

「ボーデヴィツヒはどうすんの？」

「一夏に押し付けるよ、もちろん」

「ネタ晴らし入ってるけど」

「いや、みんな想像はついてるでしょ、ヒロインは篝っていつてるし」

「そういえばそうだったな」

「さて今回はこんぐらいにするか」

「篝の弁当たのしみ」とか言ってその描写がないけど」

「だって、ただののろけじゃん」

「その一言でカットって」

「いいんだよ、まだ、初心者だし、そこらへん上手く描けないんだよ」

「駄文だしな」

「そうそう、お気に入りに入れてくれる人にはほんとに感謝だよ」

「ないてたもんな」

「こんな駄文ですがこれからもよろしくお願いします」

「「それでは！ありがとうございます」」

学年別トーナメント（前書き）

今回はタイトル通りです
霧人の活躍はあまりないです
どうぞ

学年別トーナメント

観客席

「しかし、一回戦目から一夏達とは」

「私たちはこの次だからな」

しかも一夏達の相手がボーデヴィツヒたちとは、

「まあ、あの二人ならボーデヴィツヒにも勝てるだろう」

「シャルルは相当頭が回るし一夏は作戦を忠実に行うからな」

あの二人の相性は結構いいからな

あとは一夏の白式の燃費の問題が解消されればなんの問題もないんだが

お、試合が始まるな

「一夏、行ける？」

「ああ、もちろんさ」

ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・千冬姉と何かあったらしいけど

・・・第二回モンド・グロッソ、俺が誘拐されて千冬姉が優勝できなかったこと

おそらくラウラが言っていた汚点とはそのことだろう

だからって俺だって悔しかったわけじゃない

悲しかったわけじゃない

だからこそ強さを間違えているラウラをほっとくわけにはいかない

「シャルル」

「なに？一夏」

「ラウラは俺がやる、最初は手を出さないでくれ」

「・・・分かったよ、でも無理はしないでね」

「分かつてる」

ラウラ、お前の強さは千冬姉の強さとは違う
それを分かせてやる

「ふん」

いきなり奴と当たれるとはな

織斑一夏・・・教官の唯一の汚点

奴を完膚なきまでに叩き潰し教官の目を覚ましてやる

教官に・・・あんな顔はいらないのだ

そして、あの男の次は、雨裂霧人貴様もつぶしてやる

教官から教わったことをはき違えているだど？教わってもいない貴
様に何が分かる

今度こそ負けはしない

絶対にな

「いきなり貴様と当たるとはな、手間が省ける」

「奇遇だな、俺も同じことを考えていたよ」

試合が始まるまで・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1

「「叩き潰す！！」」

ボーデヴィツヒと一夏が激しくぶつかり合った

シャルルはボーデヴィツヒと抽選で当たってしまった可哀想な女子と闘っているが、はつきり言ってただのイジメに等しい

ご愁傷様と心の中で合掌しといた

「一夏、苦戦してるな」

「でも、シャルルがすぐに向かうだろ」

一夏は近接しかないからAICの餌食になりやすいんだよな
つまりボーデヴィツヒは一夏の天敵なんだよな

お、シャルルが一夏の援護に入った

シャルルの動きは一夏と違い変幻自在かつ柔軟な思考で頭の回転も速い

ボーデヴィツヒにとってこれほどやりづらい相手はいないだろう

シャルルは自分の得意技の高速切替と砂漠の逃げ水ミラージュ・デ・デザートを使いボーデヴィツヒを翻弄している

ボーデヴィツヒとシャルルの距離が開けば一夏が斬りかかる

完璧ともいえるコンビネーションだ

接近していた一夏をボーデヴィツヒが殴り飛ばした、その隙をついたシャルルが瞬時加速で一気にボーデヴィツヒに近づく

「瞬時加速だ！？データにはなかったぞ！」

「うん、だって今初めてしたもの」

そう言っただけシャルルは左のシールドの裏から何かを出した

「パイルバンカー？」

「そう、第二世代機の最高の攻撃、痛いどころじゃないよ」

確かあれはリボルバー機構の装備によって、炸薬交換による連続打

撃が可能となっており、第2世代では最高クラスの威力を持つシャルルの切り札、連発できるし一発の威力も高い、喰らい続けたら確実に負けるだろう

あれを第三世代機に入れたら・・・恐怖以外の何でもないな

負けるのか？私はこんなところで

負けたくない、負けるわけにはいかない

私は・・・！

『——願うか・・・？汝、自らの変革を望むか・・・？より強い力を欲するか？』

力・・・欲しい、私はすべてを叩き潰す力が欲しい！！

Damage Level・・・D・
Mind Condition・・・Uplift・
Certification・・・Clear・
《Valkyrie Trace System》・・・boot・

「あああああああああ！！」

それは、絶叫に近かった

ボーデヴィツヒのISにいきなり紫電が走り、衝撃波が発生した突然の事だったのでシャルルはふつとばされてしまった

「VTシステム・・・」

「霧人、お前はあれが何なのか知ってるのか？」

「Valkyrie Trase System過去のモンド・グロツソの受賞者の戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステム」

「なんだと・・・」

「そして・・・あの姿は・・・」

ボーデヴィツヒのISは黒い謎の物体に包まれ、その物体がある姿を形どった

その姿は・・・

「織斑先生・・・雪片」

第一回モンド・グロツソ総合優勝者「ブリュンヒルデ」と呼ばれた織斑千冬とその時のIS「暮桜」に搭載されていたたった一つの武器雪片だった

「《雪片》・・・!」

怒りが込められた言葉を言う一夏

《雪片式型》を中段に構えていた一夏に、ボーデヴィツヒだったものが懷に飛び込んできた

そのまま、居合いに見立てた刀を中腰に構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃

「ぐっつ!」

一夏の雪片式型が弾かれる

そしてボーデヴィツヒだったものはそのまま上段の構えへと移る

「一夏!」

「！」

縦一直線の鋭い斬撃が襲いかかる

一夏はなんとか避けることが出来たが、軽く当たっていたらしく、刃に触れた左腕からじわりと血がにじんでいた

さらに、今の緊急回避で全ての力を使い切ったらしく、白式が光とともに消え去ってしまう

「一夏！下が――」

「・・・がどうした・・・」

「一夏？」

シャルルの声が聞こえていないらしく、下を向いて何かを呟く一夏

「それがどうしたああっ！」

何を思ったのか一夏は生身のままボーデヴィツヒだったものへと駆けていく

「うおおおおっ！！！！」

「待つて、一夏！」

シャルルは一夏を引き留める

死ぬ気かあいつ！

「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

熱くなる理由はなんとなくわかるが、行かせる訳にはいかないとシャルルは一夏の腕を離さないようにする

「どいてくれ、シャルル！邪魔をするならいくらシャルルでも」

「一夏っ！！」

「っ！」

シャルルは一喝を入れて一夏を落ち着かせる

「落ち着いて、一夏。一夏はあれが何かわかるの？」

「あいつ・・・あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉ものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを・・・くそっ！」

「一夏」

俺は一夏達の隣に来た

「霧人、どうして？」

「緊急事態だしなべつにいいだろ？」

俺はいまだに興奮が押さえてない一夏の方を向く

「一夏、確かに怒る理由はわかるがな、そう暑くなりすぎるな、シスコン」

「んな、こ、こんな時に！」

「こんな時だからこそ、冷静に行かなければならない」

俺は一夏のけを見る

「冷静さを欠けばその傷のように負わなくてもいいものを負っ羽目になる」

「・・・そうか、分かったよ」

一夏は落ち着いた顔に戻った

「でも、許せないものは許せないぜ」

「その状態では何もできないけどな」

「いや、方法ならあるよ」

シャルル、まさか

「コアバイパスを？」

「うん、それなら」

なるほど、シャルルのISのエネルギーを一夏のISに移すことで再び戦闘することが出来るということだ

しかし、ボーデヴィツヒだったものはそんなものお構いなしにこっちに少しずつ近づいている

「俺が時間を稼ぐ、何なら俺がやってもいいが？」

「いや、俺がやる」

「別にお前じゃなくてもいいだろ？」

「違うぜ霧人。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

やっぱり言うと思ったよ

まだ、付き合いは短いがこんなやつってのはあった時からだいたい把握はしていた

「あんまり遅いとマジで終わらせちゃうぜ？」

俺は緑式を展開する

「さて始めるか、力に溺れたEinsames schwarzes Kaninchen（一人ぼっちの黒兎）」

天叢雲剣を展開してボーデヴィツヒだったものと鍔迫り合いを始める

「なかなか強い力だが・・・この程度!!」

俺は雪片を受け流し、ソードビットを天叢雲剣に装着する

「行くぞ!!」

何度も剣と剣をぶつけ鍔迫り合いをする
すると

「待たせた!!」

「遅いぞ、それで行けるのか？」

一夏は雪片式型と右腕だけを展開していた

「シャルルのエネルギーもそんなになかったんだが・・・それでも行ける!!」

「なら、終わらせろ」

「おうつ!!」

一夏は真っ直ぐに、意識をただ一点、正面の敵のみにと閉ざしていた
った

「・・・・・・・・」

ボーデヴィツヒだったものが刀を振り下ろす。速く鋭い袈裟斬りだでも、そいつは織斑先生じゃない
それは――

「ただの真似事だ！」

ギンツ！

一夏は腰から抜き放って横一闪、ボーデヴィツヒだったものの刀を弾く
そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ボーデヴィツヒだったものを断ち斬った

「ぎ、ぎ・・・ガ・・・」

一夏の一闪で黒いISが真っ二つに割れる
そして、ずるっとボーデヴィツヒが吐き出されるように出てきた
その姿は弱弱しく力を求め続けたボーデヴィツヒはそこにはいなかった

「まあ、殴るのは勘弁してやるよ」

なんとなく、一夏の明日の運命が決まったような気がした

保健室前

「まあ、お前のけがも大したことなくてよかったな」
「ああ、そうだな」

俺と一夏がそんな話をしていると

「あ、二人一緒にいたんですね」

「山田先生、どうしたんです？」

「今日から、男子の大浴場が使えるようになったんです」
「ホントですか!!」

一夏、目輝きすぎ

「ええ、なので三人して入って下さい」

「え？ああ、はい分かりました」

シャルルが女子だということを知らないから俺ら以外

「霧人」

おうつ？寒気が襲ってくるよ!?

「まさか、三人して入るわけではないかな？」

「いやだな」 篤さん？俺が先に入って満喫するに決まってるじゃありませんか（汗だく）

「ならいいんだ」

こわ!!一夏、君はやっぱ明日死ぬ運命にあるようだ

「霧人、一緒に入らないのか？」

「ばかか、シャルルの事があるだろうが」

「そうだけど」

「裸見たお前ならまだしも俺は完璧アウトだろ」

「あ、あれは不可抗力だ」

「ともかく俺は間だ死にたくないんだ」

ちなみに小声なので誰にも聞こえてません

「さてと支度してくるかな」

「そうするか」

大浴場へ

「うんうん、やっぱり風呂はいいな」

疲れが抜けていい気分になる

しかし、さっきの事件のせいで学年別トーナメントは中止でもデータを取るため一回戦はやるらしい

つまり俺、篁ペア対鈴、セシリアペアの試合もあるってことだ

まああの二人の相性ほど最悪なものはない鈴は俺がやればいいしセシリアは篁が接近戦をすれば造作もない

・・・こんな考えは明日でいいか

今はこの時間を満喫しよう

「いゝい湯だな」

贅沢だよな〜IS学園・・・

「父さん、母さん、あんたたちの人生奪ったISに乗ってる俺を・・・
どう思ってる？」

答えはない

「父さんたちは今でも千冬さんを憎んでるか？それとも俺と同じようにもう許してる？」

俺は右目の周辺を触りながら呟き続ける、他の肌とは違い右目周辺の肌は少し触り心地が違う

白騎士に乗っていた千冬さんは撃った荷電粒子砲によってついた傷の後は全く消えない

「なんで、あの日だったのかな」

いままで一人になることが少なかったから、考えてこなかったが今になって急にたくさんの事がでてる

・・・いや、考えるのはよそう

もう過ぎたことだ

明日を懸命に生きるって決めたんだから

次の日

朝のホームルーム、シャルロットの姿はなかった

それにボーデヴィツヒもいない

朝、起きてからその姿を見ていない

昨日の様子を考える限りでは負傷で休みではないだろうし、事情聴取かなんかだろう

「み、みなさん、おはようございます・・・」

教室に入ってきた山田先生は何故かふらふらとしている

「今日ですね・・・みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと・・・」

山田先生の話にクラスみんなは一斉に騒がしくなる

今のこの時期に転校生がまた来るわけだから当然と言えば当然だでも、『すでに紹介は済んでいる』？

もしかして――

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

やっぱりか、この声は最近聞いている声だ

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ぺこりと、スカート姿のシャルロットが礼をする

一夏を始めクラス全員がぽかんとしたままだ

俺は？山田先生が話してた時から予想はついていたから問題なかったよ

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はああ・・・また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります・・・」

「

山田先生の憂いはそこにあっただか

「え？デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「って、織斑君、同室だから知らないってことは――」

ザワザワザワッ！

教室が一斉に喧噪に包まれ、それはあっという間に溢れかえる
一夏・・・さらば

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ぴきい！

何この音

「一夏あー!!」

鈴がIS展開してこっち来た!!

「死ね!!!」

問答無用、弁解の余地もなしにISアーマー展開、それと同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される

『哀れ高校一年生男子、同学年女子に殺害される。死体は原形をとどめておらず、クラスメイトは口々にに悲しみの声を漏らす』

「ミンチでした」「トマトケチャップでした」「地面に落ちた柿でした」「あるいはイチジクでした」「破裂した缶コーラでした」

何て記事が出来るそう

ズドン!!

鈴は容赦なく衝撃砲を放った、俺が横にいるのに

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

怒りのあまり肩で息をしている鈴
その姿は毛を逆立てて怒る猫のようだな

ん？あれ？俺たち生きてるのか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ボーデヴィツヒ？」

俺たちと鈴の間に割って入っていたのはボーデヴィツヒだった
その体には黒いIS『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏っている
おそらく、衝撃砲を得意のAICで相殺したのだろう

「ふう・・・助かった。ありがとな、ボーデヴィツヒ・・・ISは
無事だったんだな」

「・・・損傷したパーツ以外は以上はなかった。むしろ、調子がよ
り良くなった。あと、私のことは、『ボーデヴィツヒ』ではなく『
ラウラ』と呼べ」

「は？なんでだ——むぐっ！？」

いきなりだった

いきなり、一夏は胸ぐらを掴まれ、ボーデヴィツヒに引き寄せられ、
気づいたときには——唇を奪われる キスをされてた

「！？！？！？！？！／／／／／」

胸ぐらと唇が解放された一夏はその場から離れ、口を腕で押さえた
そして、鈴を始め、その場の全員があんぐりとしている

「お、お前は私の嫁にする！夫婦なのに、名字で呼ぶのは変だから名前で呼べ！これは決定事項だ！異論は認めん！」

「・・・嫁？婿じゃなくて？」

一夏がツツコミを入れる

まで、ツツコムところはそこじゃない

「あ、あつ、あ　　！」

ぱくぱくと口を動かして、声にならない声をあげている鈴

「アンタねええええっ！！！！」

ジャキン！と再び衝撃砲が開く

ジャキン！

「一夏さん・・・覚悟は出来ていますわよね？」

次にセシリアが一夏に狙いを定める

「ま、待ってくれ！今のは・・・」

俺はその光景をにやにやしながら・・・

スウ

「あの筈さん？なんで俺は日本刀を突き付けられてるんでしょうか

？」

「霧人、お前は・・・」

「入ってませんよ！！俺は昨日一人でした！！ほんとです」

「霧人は一緒に入ってないよ」

サンキューシャルル！じゃなかったシャルロット

箒は納得して刀を収めた

・・・って、シャルロットさん？なぜあなたはパイルバンカー、盾殺し（シールド・ピアース）を展開してるんですか

「一夏」

「お、おう？」

「一夏は平気で女の子とキスできるんだね」

「だから、待ってくれ！あれは」

「「「言い訳無用！！」」」

「ぎゃああああああああああああああああああ」

南無南無

これはクラス一同の心の感想だった

学年別トーナメント（後書き）

「作者と霧人の雑談コーナー!!」

「今回はゲストをお呼びしています」

「それでは早速来てもらいましょう」

「スーパー朴念仁こと織斑一夏君です」

ぱちぱちぱちぱち

「どうも」

「くらいなもつとシャキツとしようよ」

「あの後でシャキツとはできませんよ」

「おいおい、小説内では永遠の16歳で作者は17だからって敬語はいらんぞ」

「なんだそのどうでもいいプチ情報は」

「さあ切り替えて、今回はどうでしたか？」

「駄作でした」

「俺ばかりひどい目になってます」

「一夏君それはどの小説でもそうだよ」

「霧人の発言には突っ込まないの？」

「事実を述べてるからね」

「あっさり認めたな」

「さて、一夏君、何か疑問に思ったことは無いかな？」

「霧人の名前の由来って？」

「由来か、なんかかつこいい感じがしたんだよね」

「それだけ!？」

「あと雨を裂くと霧になるじゃん」

「そっち先に言えよ」

「ぶつちやけ適当に思い付いた名前だから」

「死ね!!」

どかああああん

「しかし、一夏は相変わらずだよな」

「進行係の作者吹っ飛んで行ったけどいいのか？」

「いいんだ」

「いいんだ、相変わらずって？」

「朴念仁が」

「どういうこと？」

「なんでそこまで鈍感かな？」

「知らないよ、そんなこと」

「まあ、話が続かなくなったので」

「「「今回はこれで終わります!!」ありがとうございます!!」」」

」

「今、作者の声聞こえなかったか？」

「幻覚だ」

「いや、いるからここに」

専用機持ちバトルロワイヤル（前書き）

今回は原作と関係なし

しかも短いです

どうぞ

専用機持ちバトルロワイヤル

グランド

「今回は専用機持ちで模擬戦・・・バトルロワイヤルをしよう」

「なんで言い直したんですか？織斑先生
言ってる途中で思いつきましたよね？それ

「バトルロワイヤルって具体的にはどうすれば？」

「簡単だ、協力一切なしでただたづぶし合え」

教師の言葉とは思えないよ、つぶし合えて・・・

「まあ、ここは軽くひねっておきましょうか」

「そうですわね」

誰を？

「なんだか緊張するな」

「軍でもやったことはある、造作もないな」

ラウラ（あの事件の後みんなと和解した）たくましく見えるよ

「よし、やってやるぜ！」

無駄に暑いね、一夏

「最後まで残った奴には、学食一週間ただ券をくれてやろう」

「「「「「なに!?!」「」「」「」
「それでは始めるぞ」

全員してISを展開
円を描いて空に移動する

「負けるわけにはいかないわね」

「これは見逃せませんわ」

「張り切って行こうかな」

「一週間ただ飯食うチャンス」

みんなやる気十分だな

しかし、俺のやる気もクライマックスだぜ!!

「「覚悟はいいな? 貴様ら」」

ラウラとセリフがまる被りしたがまあいいや
しよっぱなから全力で行くぜ!!

「開始!!」

始まりと同時に鈴は一夏に、ラウラはシャルロットに向かって行った
すなわち

「今日こそ勝たせてもらいますわ!!」

気合十分なセシリアが俺の相手

俺は天叢雲剣を展開、一緒にライフルビットも展開する

セシリアはビットを出していた

勝機はすでに俺にあり!!

「すでにティアーズを出しているとはな、余程負けたいらしい」
「今回こそは！！」

セシリアがティアーズを動かすが俺はライフルビットでティアーズを狙う

セシリアはティアーズの操作しかできない
つまりは！！

「動きがないがそれは倒してくださいと言ってるのか？セシリア」
「くっ」

セシリアの意識がこっちに向いた瞬間ティアーズをすべて落とした

「なっ！ティアーズが！」
「こっちに意識を向けるからそうなる！！」

俺はセシリアに一気に近づく

セシリアはスターライトMK？でこっちを狙うが

ライフルビットの餌食となりセシリアは素手になってしまった

しかし、セシリアは近接武器、インターセプトを展開

俺に向かってくるが、セシリアの接近戦は素人に毛が生えたレベルであり

接近戦の得意の俺には通用しなかった

インターセプトを天叢雲剣で叩き斬りライフルビットと天叢雲剣でシールドエネルギーを零にした

「また・・・」
「相手が悪かったな」

さてとバトルロワイヤル、つまりは乱入してもオッケーって事だよな
俺はラウラとシャルロットの方へ向かう

「邪魔するぜ!!」

その声と同時にライフルビットで牽制する

「うわっ!」

「ちっ!」

二人は何とか避けていた、不意打ちだったんだけどな

「さて、全力だぜ?」

「もちろん」

「当たり前なことを」

ソード、シールドビットも展開する

先に動いたのはシャルロットだった、俺に銃弾の嵐を降らせる、しかし、シールドビットによってすべて防がれてしまう

ラウラは俺に攻撃を仕掛けているシャルロットを狙おうとする
しかし、そこへ俺が八咫鏡で狙い撃つ

ラウラはAICを使って攻撃を無効化するが俺のソードビットの餌食となりさらにシャルロットが俺に攻撃が効かないと知るとラウラに標的を変え、銃弾の雨を降らせた

ラウラのシールドエネルギーがみるみる減っていく
しかし、シャルロットも今隙だらけだ

「チェックメイト!!」

八咫鏡とライフルビットで二人に攻撃をかける

この攻撃でラウラのシールドエネルギーは零、シャルロットはエネルギーが半分まで減った

さっきの攻撃によりシャルロットはまだ体制を整えきれてない

再び攻撃をかけようとした瞬間シャルロットがいきなり吹っ飛んだ

「鈴か！」

「そうよ、ここであんたに今日こそ勝つてやる！」

いまだにそれを言うのか、俺のシールドビットに傷一つつけられないくせに

ソードビットで鈴に攻撃を仕掛け、隙を作らせる

・・・できた！！

しかしその隙はシャルロットに取られてしまった

「終わりだよ！！」

「なっ！きゃあああ」

シャルロットは問答無用と言った感じでシールドピアースを鈴にぶつけている

・・・俺がいる事忘れてるんじゃないかな！！

「『絶刀』十閃！！」

十個の斬撃を鈴たちに飛ばす

「えっ！？うわっ！！」

「はっ？きゃあああ」

二人とも墜落

そっぴや、一夏どうしたんだ？

あ、落っこちてる

ということとは・・・

俺シヨリ！！

その後一週間俺は学食を楽しんで食べた、まる

専用機持ちバトルロワイヤル（後書き）

何か霧人チートみたいになってるな
てか今回一度も名前出てない、霧人
こんな感じです
ありがとうございました

レゾナンスでデート!?(前書き)

今回はレゾナンスのお話です
どうぞ

レゾナンスでデート!?

く寮内く

暇だな

今日はせつかくのお休みなんだがやることがない

・・・あ、臨海学校があるんだっけか

水着新しいの買わないとな

えくと、確かレゾナンスって店があるんだっただよな
支度支度

「ここか、レゾナンス」

広いな。さすがすべてのものがここにあると言われていただけある
さつき一夏とシャルロットとそれを追跡しているセシリア、鈴、ラ
ウラを見かけたが・・・無視しよう
えくと、水着コーナーはつと

「霧人？」

「ん？ 箒か」

案内板を見ていると箒が横に来ていた

箒は制服姿だった・・・残念

（作者が箒に似合う服を書けないだけである）

「箒はここへ何しに？」

「ああ、水着を買おうと思ってな」

「奇遇だな、俺もそうなんだ」

「・・・なら、一緒に行くか？」
「・・・もち」

今日はなんと素晴らしい日だろうか！

心の中でガッツポーズをしているのは俺だけの秘密だ

「しかし、ほんとにいろんな店があるよな」

「そうだな、おかげであれがないから遠出するしかないということもないな」

「箒はほかによると来ないのか？」

「生活用品や文房具ぐらいだな」

「そうか、俺も買わないとな」

などと他愛無い話を続けて

水着売り場に着いた

「じゃあ、１０分後またここで」

「うむ、そうだな」

まあ、トランクスタイルのものでいいし、色はどうしようか
ふと、緑式の待機状態のグローブが目に入った

緑、緑・・・お、緑式と同じ色のものがある

うん、サイズも合ってるし、値段もいいな

これにしよう

さてと、集合まで時間があるがとりあえず戻ろう

「きゃあああああああ」

「・・・山田先生？」

・・・無視しよう、俺は何も聞いてない
集合場所で待っている

「うん？霧人」

「鈴か、一夏を追っかけてたんじゃないのか？」

「なっ、なんであんたが知ってんのよ！」

「バレバレだったよ、それに不審者みたいだったし」

山田先生筆頭に鈴、シャルロット、セシリア、ラウラがいた

「シャルロット、お前一夏といたんじゃないのか？」

「ああそれは織斑先生と一夏で買い物させようって山田先生が」

「まあたまにはいいんじゃないかと思ひまして」

山田先生何て優しいんだ、優しすぎてクラスのみんなに若干馬鹿に
されてるけど

「霧人さんは何をしてるんです？」

「箒の事を待ってる」

言った瞬間みんなして固まった
地雷ふんだかも

「まっ、まさか！」

「」「」「デート……？」「」「」

ウルサッ！！

鼓膜破れるかと思ったよ

「シャルロット、お前も同じことしてだろ」

「うつ、そうだけど」

「あんたら付き合ってたの!？」

「いや、ただけど」

「「「「まだあ!?!?」「」「」

「ああ、告ったし」

「「「「「……マジ?」「」「」

山田先生、口調がみんなと同じになってる

「このリア充!！」

「だからまだだって」

「爆発しなさいな!！」

「落ち着けお前ら」

「何と言ってプロポーズしたのだ!！」

「恥ずかしいから言えるわけないだろ」

「いつ告白したの？」

「中二」

「「「「まだ返事貰ってないの!?!?」「」「」

「ああ」

「何とも思わないの？」

「心の整理がついたら答えだすって言ってたから」

「まだ待ってんの!？」

「ああ」

「「「「「……（驚愕）」

「お、箒だ、それでは山田先生、お前らまた学校で」

俺は箒のところに行った

「終わったか？」

「ああ霧人は」

「俺も終わつたよ」

そのあと生活用品や文房具を買いに行った

「なんか食つか？」

「そうだな・・・」

箸が周囲を見渡してると一点で止まった

「クレープか？」

「・・・ああ／＼」

なぜ赤くなる？

「何味がいい？」

「イチゴ」

「了解」

俺はクレープを買いに行った

「よく考えたらあそこって相当有名なクレープ屋なはずだが随分空いてたな」

まあそのおかげで時間がかからなくて助かったが・・・
何だあいつら

「なあいいだろ？」

「何度も言っている、断る」

「釣れないこと言っなよ」

「貴様らなどと遊ぶ時間はない」

「だからってそのクレープ買ってる男のことまつのか」

「君が命令して買わせてるんだろ？そんな弱い男なんかほっといて遊ぼうぜ」

「買わせてなんかない、それに貴様ら以上に強い」

「・・・つけあがるのもいい加減にしろよ」

「そうだぜ、いくら女尊男卑だからってこれ以上は許されないぜ」

「・・・なら」

「お前らの態度も許されないがな」

「ああ！？なんだっ！？ゲフアツ」

イラついたので二人のうち一人の顎に蹴りを入れたやった

「なっ、なんだてめえ」

「貴様に教える名前などない」

「んだと！ぐぎゃああ」

男の一番の急所を蹴り上げてやった
あまりの痛みに気絶したようだ

「少し待たせたかな？」

「いや、問題はない／＼」

なんか無自覚で好感度あげてるみたい

「ほら、イチゴ味」

「ああ、ありがとう」

その後若干いい雰囲気になりながら俺たちは学園に戻った

レゾナンスでデート！？（後書き）

「うえ〜〜い」

「黙れ、この駄作者！」

ボグシヤア

「すみません、今回話がなかなか思いつかなくて」

「だからってこんなのあるかあ！！」

「でも嬉しかったでしょ？」

「・・・・・・」

「沈黙は肯定とみなします」

「今日のゲストはシャルロットさんです」

「どうも」

「駄作者である自分のせいでなかなか出番少ないですがどうです？」

「仕方がないんじゃない？」

「霧人！お前には聞いてない」

「一夏は相変わらずだからね」

「いきなり何のお話！？」

「霧人のヒロインは決まってるけど一夏はどうするの？」

「ノーコメントで」

「そもそも終わり方どうすんだよ」

「自分で考えるしかない」

「もう一個の天才以上完璧未満とかぶんなよ？」

「かぶるかも」

「おい」

「まあ仕方がないんじゃない？」

「駄作者ですから」

「自分で言ってて虚しくならない？」

「事実だからね」

「駄目だこいつ」

「とまあいつもの確認は金輪際しないようにして」
「なんで？」

「ウザがられるかもしれないし」
「そうだね」

「」「今回もありがとございました」「」

「」「また来週！」「」

臨海学校初日と二日目ちよっと（前書き）

今回は臨海学校一日目と二日目の最初ぐらいです
どうぞ

臨海学校初日と二日目ちよつと

くバスの中

「海！！見えたあ」

バスの中で女子がそう叫ぶと他の女子も一斉に海を見る

広々とした真つ青な空の下にその空と同じくらい広く青い海が広がっていた

海かく中二の夏からまったくだったな

・・・目の前で一夏達が騒がしいが無視しよう
あと隣のこいつらどうにかなんないかな？

俺の隣が筈その隣がラウラなんだが・・・なにそわそわしてんだ？
まったくわからん

「貴様ら静かにしろ、もうじきつくぞ」

織斑先生の一言に一夏達も女子たちも静かになった

言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着

四台のバスからIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した
つか一年生ってこんなにいたんだな。知らなかった

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、
従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「くくよろしく願いしまーす」くく

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする

この旅館には毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将が丁寧
にお辞儀をした

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね。あら、こちらが噂の・・・？」

女将がふと、俺と一夏の方を見て千冬さんにそう尋ねる

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分け難しくなってますって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけです。挨拶をしろ、馬鹿者」

ぐいっと一夏の頭を押さえる。俺はやられる前に頭を下げる

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「雨裂霧人です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

そう言つて女将はまた丁寧なお辞儀をする
女将なだけあって気品のあるものだ

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はいと返事をする。とすぐさま旅館の中へと向かう

「ね、ね、ねー。ムックーにおりむー」

「その呼び名やめてくれっ！ー！」

「うおっ!？」

変な呼び方をしながら飛びついて来たのはのほほんさんだった最近、よくこうやって飛びついてくるびつくりはするがそんなに衝撃はこない

「じゃあザッキーとおりむって部屋どこ？一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えてー」

その言葉で周りにいた女子が一齐に聞き耳を立てるのがわかった普通は男子が女子の部屋に行きたがるものなんだが、俺と一夏は残念ながらそんな気持ちは一切持っていない

「いや、俺も知らない。霧人は？」

「同じく、廊下にも寝かされるとか？」

「わー、それはいいねー。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいってー」

「寝ごごち悪そうだな」

ちなみに俺たちと女子を一緒の部屋で寝泊まりさせるわけにも行かないということ、俺と一夏の部屋はどこか別の場所が用意されるらしい

らしいというのも、山田先生がそう言っただけで明確には聞いてないからだ

「織斑、雨裂、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

千冬さんのお呼びだ。急がないとまた出席簿アタックを喰らってしまふ

俺はのほほんさんにじゃあなと言って別れた

「それで、織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんですか？」
「黙ってついてこい」

俺と一夏は黙って千冬さんの後をついていく

「ここだ」

「え？ここって・・・」

「教員室だな・・・」

ドアにばんと張られた紙は言った通り『教員室』と書かれている

「最初は織斑と雨裂の二人部屋という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

はあ、とため息をついて千冬さんが続ける

「結果、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

「そりゃまあ、そうだけど・・・」

わざわざ遊ぶために鬼の寝床に入ろうとする勇者はいないだろう

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな」
「はい、織斑先生」
「それでいい」

部屋の中はISの学園の部屋よりもいい感じの部屋だった
しかも窓を開けると海が一望できる

「さて、今日は一日自由時間だ、遊んで来い」

「はい」

「了解です」

「返事はいだ、馬鹿者」

「・・・はい」

まあ切り替えて遊ぼう

「うん、やっぱり近くで見るとひろいよな」

「おう、しかも真つ青だしな」

「きゃくくく、織斑君たちかつこいい」

「すごく筋肉が引き締まってる」

うん、どうでもいい感想です

てか一夏って意外と筋肉あるのな

「お前意外と鍛えてるんだな」

「そういう霧人だって」

「そりゃ、IS乗るんだからな」

うん？一夏の後ろに・・・

「とりゃ」

「おわあ」

鈴か、小さすぎて見えなかったよ

「霧人！一言多いわよ！」

しまった、この女子読心術使えるんだってことは、表情に出てたって事か

「いやゝすまん、事実だから」

「むきー」

「つーか鈴！降りろ」

「あ、霧人さん、一夏さんは？」

「ここ」

「え？な！鈴さん！降りなさい」

「いいじゃない、いい監視塔よ」

「俺は人だ！塔じゃない」

しゅしゅ、鈴は降りた

「なら、一夏！どっちが早く泳げるか勝負よ！」

「駄目ですわよ！一夏さん、オイル塗って下さらない？」

「おう、いいぜ」

「ぐぬぬ」

「女子が出しちゃいけない声だな」

「うっさいわねそうよ、霧人！あんた付き合いなさい」

「いいぜ、絶対俺が勝つがな」

俺たちは勢いよく走りだし二人同時に海に飛び込んだ

「プハア」

鈴が顔を出しクロールを始める

「（あれ、霧人が出てこない？溺れたとか？）
「ぷはあ」

浜辺から鈴より十五メートルぐらい離れた海から俺が顔を出す
そう、俺はイルカのごとく水中を泳げるのだ

「（な！あんなの反則よ！！）」
「（鈴の声なんて聞こえない）」

俺は鈴と同じクロールで鈴との差を広げようと泳ぎだす

結果

「むきー」
「百年早いんだよ、はっはっはっ」

俺が勝ちました
そんなことしてると

「いやゝ大変だった」
「あ、一夏」

「一夏！今度こそ勝負よ！」
「おう、いいぜ」
「・・・鈴、溺れんなよ」

「溺れるわけないでしょ？私は前世人魚だったんだから」

お前、俺に負けたよな

「ザツキー、ビーチバレーしょ」

「ビーチバレーか、いいぜ」

2対2か

俺のペアがのほほんさんというのが若干不安なんだが

ちなみにのほほんさん、本名^{のほとけほんね}布仏本音

一夏が名前を覚えられずこのあだ名をつけている

俺は面白いからのほほんさんと呼んでいる

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を・
・見よ！」

いや意味わからん、とツツコミたかったが、いきなりのジャンピン
グサーブ

しかも、スピードといい角度といい申し分ない

「だが、甘い！」

「なんですと!?!」

俺はそのサーブをレシーブでのほほんさんの真上に上げる

「いっくよ」

おお、意外といいレシーブ

「受け取れ、七月のサマーデビル」

「なんと！」

女子に向かって手加減なしのスパイクを放つ
もちろん腕に向かって

「くっ、狙われた!？」

しかし、対応できずボールは場外へ

「ザッキー容赦ないね」

「サマーデビルとかいう二つ名持ってるんだからできるんだろうな
」と思ったただけだ」

「ぐぬぬぬ」

だから、それ女子が出していい声ではないでしょ

「じゃあ今度はこっちから・・・な!」

少し緩めのサーブ

「なんの!」

「よし、ぶちかましてやりな!」

いやいや、言葉遣いが荒いって

「サマーデビルの一撃で沈みなさい!」

「ほい」

「ばかなあ!？」

鋭い一撃だった。顔に来るって分かってたし
のほほんさんがまたいいレシーブ上げたので

「させない!」

ブロックか、しかし

「ちょんつと」

「んなあ」

軽くたたく、そのボールはブロックの上を通り
もう片方が対応できずに地面につく

「くつ、なんという手練れ！プロか？」

「いや、素人だから」

何て話をしていると

一夏とシャルロット、ラウラがこっちに歩いてきた

・・・ラウラ、ふらふらしてんだけど大丈夫か？

「あ、おりむゝたちもやろうよ」

「お、いいな」

「うんやろうか」

「・・・かわいい・・・かわいい」

一人に戦力外通知出した方がいいと思います

「じゃあまず俺が抜けるかな」

・・・うん案の定ラウラはぼけーとしててあのサマーデビルのスパ
イクの餌食になった

「じゃあのほほんさん、そっちに入って俺がこっちはいるから」

一夏と同じになるとなんか卑怯な気がするからな

「行くよ!!」

シャルロットの一声と同時になかなかいい鋭さのサーブが来る

「よし、チャー」

「了解、シュ」

「最後、メン」

一夏めがけて全力スパイクを放つ

「おわっ!」

対応しきれずボールは場外

どんなもんよ

などと楽しく遊んだ

〈食堂〉

「ふむ、上質な刺身だな」

さすが、海の近くだけあって海産物がほとんどだな

俺は反対側に箸、それ以外ほぼ名も知らない女子ばかりの場所にいる
なんでこうなった?

一番先にここに来て適当のここに座ったら

箸が反対側にきて、その後いまだ「……………」とすごい大声
でかつ大人数が俺の近くおよびその周辺の席に座って行った
ものすごい速さだったな

一夏は隣にシャルロットとセシリアがいる
くそ、知り合いが隣で羨ましい
俺は箸以外知らん！しかも箸はただ、黙々と飯食ってるだけだし
・・・考えるのがあほらしくなってきた
食おう

く部屋く

「ふーいやー旨かった」
「まっただな」

なんて二人で談笑してると

「ん？お前たちだけか？女の一人も連れ込まんとは詰まんやつら
だ」

「・・・連れ込んでたらどうしたんです？」
「さあ？どうするだろうな？」

楽しんでるよ、この人

「まあいい、織斑、久しぶりに」
「ああ、はい」
「なにすんの？」
「マッサージさ」

ほお

二人がマッサージをし始め、俺は暇なので持ってきた、『天才シェフが認めた料理百選』を読み始めた

てか、織斑先生、気持ちいいんだろうがその艶やかな声やめてくれませんか？

気が散るんです

・・・うん？外に人の気配・・・4人、いや5人か
俺は入口に近づき

ガラッ

「「「「「きゃあああ！？」」「」」」」

シャルロット、ラウラ、鈴、セシリアが床と熱烈なキスをして
筈は少し離れたところで立っていた

「何してんのさ？」

「べつべつに？ただこの前を歩いてただけだけど」

「なら、なんで襖開けただけでこっちに倒れてきてんの」

「いきなり開くから驚いただけですわ」

「だからってこっち向いて倒れんのおかしくないか？歩いてただけ
なら倒れないと思うけど」

「いろいろあるんだよ」

「なんだ、いろいろって？」

「いろいろは、いろいろだ！！」

「もうわかったよ、言い訳は」

「お前たちが、ちょうどいい、入れ」

「「「「「え？」」「」」」」

「織斑、雨裂、風呂入ってこい」

「「はい」」

なんだろう、俺等に聞かせたくない話か
・・・恋愛関係の話し？

「失礼なことを言うなバカめ。なにちよつとした口封じだ」

そう言つて私は冷蔵庫から新たに取り出したのは、星のマークがキラリと光る缶ビールだ

プシュッ！と景気のいい音を立てて泡飛沫が飛び出す

それを唇で受け取つて、そのまま私はゴクゴクと喉を鳴らした

「……」

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが　それは我慢するか」

いつもの規則と規律に正しく、全面厳戒態勢の『織斑先生』と認識している女子全員がまたしてもぽかんとしている

特にラウラはさつきから何度もまばたきをして、目の前の光景が信じられないかのようだった

「おかしな顔をするなよ。私だつて人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

ラウラはぽかんと開いた口から何も言葉が出てこないようだ
代わりに、ブラックのコーヒーをごくりと嚥下する

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

そう言つてニヤリとする私は、全員の手元をざつと流し見る
そこでやっと女子一同が飲み物の意味に気づいて「あっ」と声を漏

らした

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールをラウラに言って取らせ、また景気のいい音を響かせて千冬が続ける

「お前らあいつのことどう思っている？」

「あたしは・・・えっと・・・より男前になっているがいいなあ・・・て」

モゴモゴさせて、小さい声で言う鳳

「わ、わたくしは・・・なんて言えばいいんでしょう・・・か、格好いいからでしょうか・・・」

さらに鳳よりもモゴモゴさせて喋るオルコット

「僕——あの、私は・・・優しいところ、です」

ぼつりとそう言ったのはデュノアで、声の小ささとは裏腹に真摯な響きがあった

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ？」

「そ、そうですね・・・。そこがちょっと、悔しいかなあ」

シャルロットは照れ笑いをしながら熱くなった頬をぱたぱたと仰ぐ、三人はその様子を羨ましいのか悔しいのか、じいーっとシャルロットを見つめた

「で、お前は？」

さつきから一言も話していないラウラに、千冬さんが話しかけると
ビクツと身をすくませながら言葉を紡ぎ始めた

「つ、強いところが、でしょうか・・・」

「いや弱いぞ」

「いえ、自分にはない強さが・・・あるので」

・・・ん、そういえば

「篠ノ之、お前はどっ思ってるんだ？」

「昔より剣の腕が落ちてるのですこし氣にくわないというか」

うん？他の奴らと比べて随分落ち着いてるな

「篠ノ之、お前もしかして、雨裂のほうか？」

「な——っ／＼」

「そうか、たしか中学の時一緒になったことがあったらしいな」

「はい・・・」

「その時からか？」

「少しですが・・・」

「なるほど」

ふむ、やはりこいつらはからかいがある

「あいつは、家事全般が出来るし、マッサージも上手い、付き合える女は得だな。欲しいか？」

「」「」「くれるんですか！？」」「」「」

「やるかバカ」

私がしてやったり顔で言うと、女子一同はええ〜・・・と声なき突っ込みが聞こえた

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする、ガキども」
「〜」
「〜」

「さて、話はこれで終わりだ」

しゅしゅと腕で帰れと示す

さて、どうなることやら・・・

〜次の日〜

「さて、今日は専用機持ちの」

「織斑先生」

「どうした、オルコット」

「どうして箒さんがいるのですか？」

「ああ、それは「ちーちゃーん」・・・あのバカ」

森の方からドドドドドという音と共にどこかで聞いたことのあるような声が聞こえた

やがて、森の奥から姿を現したのは、頭にウサ耳のカチューシャをつけた

「束」

織斑先生が一言つぶやいた

そう、彼女は篠ノ之束

箒の姉であり、俺の両親を殺した白騎士の開発者

「さあさあ、ちーちゃん、この束さんとの愛を深めるためのハグを・
・」

「黙れ」

「頭から出ちゃいけない音が……!?」

織斑先生が束さんにアイアンクローをかけている

束さんの頭からメキメキという音が出ている

しかし、その後何事もなかったように束さんはそれをすり抜けて

「やあやあ、あつくん久しぶり」

「お久しぶりです、束さん」

「いやー二年で随分男前になったね」

「束さんは変わらずお綺麗で」

「いやゝ褒めても何も出てこないよ」

「挨拶もいいが、自己紹介しろ」

「しょうがないね、私が天才の篠ノ之束さんだよ、はろ」

変わらんこの人、十年前も二年前も今も

「やあ!」

「どうも」

箒、反応薄すぎだろ

そりゃたしかにまだわだかまりがあるだろうが

「箒ちゃんも大きくなったね、特に胸が」

ガンっ!

「殴りますよ」

「いったゝ、殴ってから言った、しかも、木刀で」

うん、どこにそんなもの持ってた？

「姉さん、私の」

「オーケーオーケー、全部言わなくても分かってるよ」

そう言つと束さんは上を向いた

「さあ！とくとご覧あれ！！」

そう言つてみんなの目線が上を向く

俺はなんとなく下を向いてみた
すると

どっこおおおん

と轟音を立て地面から鉄の塊が出てきた

「ふっふっふっ、みんな騙されたね？」

「どうでもいいことをするな」

「しよугないなゝ、これが箒ちゃんの専用機『紅椿』（あかつばき）だよ」

「これが、私の専用機」

「そうさゝ、この紅椿は最先端の第四世代機！既存のISをはるかに凌駕する機体さ！」

「だつ、第四世代機！？」

「そう、第四世代機はなんと展開装甲と呼ばれる装甲によつてどんな時、どんな場所にも適応できるという優れものを搭載したISな

のです」

「そんなことができるのか・・・？」

「この束さんに不可能はないのだよ！」

みんなが啞然と紅椿を見ていると

「あと、この展開装甲は白式の雪片にも搭載してまゝす」
「ええ！？」

てことは

「白式も第四世代機つてことですか？」

「そうだよ、てかあつくくん君はとぼけるのがうまいね」

「何のことでしょう？」

「あつくんの緑式だっけ？あれも紅椿と同じ展開装甲じゃないか」
「「「「「ええっ！？」」「」「」」」

黙ってたのに・・・

「この束さんと同じことを考えるなんてあつくくんも天才だね」

「まあまだ試作なんで紅椿ほどとはいきませんけど」

「それでもすごいことだよ、とまあ話はこころへんにしておいて」

そう言うつと束さんは箒をみて

「紅椿のフォーマットとフィッティングするから箒ちゃん乗って、
乗って」

「姉さん、乗れないんですけど」

紅椿は直立状態で乗れることが出来ない状態になっていた

「おお、忘れてたよ、ならあつくん運んであげて」
「俺ですか？」

「そうだよ、同じ第四世代機持ちなんだから」

それなら一夏も同じだけど
まあ役得、役得

そのあと紅椿の性能テストの結果に驚いたりしていると

「織斑先生！！」

「山田先生、どうしたんです？」

「実は・・・」

「何があつたんだろう？」

「あの慌てよう、ただ事ではあるまい」

しばらく教師二人が話をしててそれが終わった後

「緊急事態だ」

織斑先生の凜とした声と緊張に包まれた雰囲気是相当緊急なのだと
認識した

臨海学校初日と二日目ちよつと（後書き）

とこんな感じです

ありがとうございます

白は敗れ傷つき緑は海に沈む（前書き）

今回はまあだいたい想像つくでしょう
どうぞ

白は敗れ傷つき緑は海に沈む

とある室内

織斑先生の話によるとアメリカとイスラエルの共同製作で造られた

IS、銀の福音シルバリオ・ゴスベル

さらにアメリカが極秘に開発していた戦争用IS、大量虐殺の太陽ホロコースト・ソーラー
この二機が実験中謎の暴走、基地やらを破壊し、逃走したらしい
ちなみに二機とも操縦者がいない状態で暴走したらしい

銀の福音はブルー・ティアーズと同様に射撃特化型の機体であり、シルバリオ・ゴスベル
特殊射撃による広域殲滅を目的としたISであり 主砲の銀の鐘はシルバリー・ベル
全砲身36門の同時展開を可能にしこれにより広域攻撃をする

大量虐殺の太陽も特殊射撃による広域殲滅を目的としているISで
あり主砲太陽の沈黙はバックパックに搭載されているソーラーシスソーラー・サイレント
テムによりエネルギーを大量に貯蓄しそれをバックパックに搭載さ
れている砲身8門により銀の鐘以上の破壊力で殲滅するといった戦
争においてこれほど厄介なものはないだろう

このソーラーシステムは常時起動しており太陽の沈黙使用中でも貯
蔵するためインターバルは10秒ほどしかない

「なんですか？このでたらめなISは？」

「このソーラーシステム、死角がないよ」

「このバックパックを集中的に攻撃して機能を殺すしかないな」

「とりあえず銀の福音が先にここに来る、この福音の対応を考えろ」

「太陽が来る前に落とさなければならぬということは一撃で落とすしかない」

「なら、一夏の零落白夜だね」

「ああ・・・って俺!？」

「当たり前だろ、なにいつてんだ」

「お前意外誰がやるというんだ？」

「霧人がいるだろう？」

「まあやれんこともないが一撃は無理だぞ」

「うぐう」

「やりたくないなら、やらなくていいんだぞ」

「・・・やるよ、やってやる」

まったく一夏の奴、最初からその気持ちでいろよまったく

「では、高速機動を行える装備を使えるものは？」

「私の強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」がありますわ」

「ならばそれを「ちょくく」と待ったーーーーー」・・・束」

天井裏から頭だけだして束さんが織斑先生の言葉を遮った

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「出て行け・・・」

頭を押さえ出す千冬。

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿と緑式の出番なんだよっ！」
「なに？」

「紅椿と緑式のスペックデータを見てみて！パッケージなんかなくても超音速機動ができるんだよ！」

orz 隠してたのに

「なるほど、これなら」

「で、ですが織斑先生！」

「オルコット、お前その装備はインストールしたのか？」

「うっ」

「してないのだな、ではこの作戦でいく」

「さてと、飛ぶぞ緑式」

「来い、白式」

「行こう、紅椿」

三人して一斉にISを展開する

「もう一度作戦の説明をするぞ。織斑が篠ノ之の背中に乗り、雨裂がその背中を押して速度を上げる、一気に接近、零落白夜を叩き込む。万が一失敗した場合は一度撤退、それが不可能ならば戦闘に入つて隙が出来次第撤退だ、いいな？」

「「はい」」

真剣な面持ちで返答する2人。だが、約1名の声だけ、妙に喜色に満ちている

「しかし、偶々私達がいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせれば出来ないことなど無い、そうだろ？」

「だろうな。でも箒、先生達が言ったとおり、これは訓練じゃなくて実戦なんだ。何が起きるか分からないから、十分気をつけて」

「そんなことは分かっている。何だ、怖いのか？」

「いや、そう言う訳じゃ」

「安心しろ、お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいい」

こんな感じで、箒は妙に気分を高揚させている。専用機が手に入った嬉しさかどうかは定かではないが、少なくとも、その態度はこれから闘いに赴く者のそれではない

「箒、間違えるなよ」

「霧人、何も間違えはしない、安心しろ」

わかってねえ、全然分かってねえ

一夏にプライベート・チャンネルを開く

「どうした？」

「箒が目に見えて浮かれている、あの状態じゃどんなミスするか分かったもんじゃない、だからいつでもフォローできるようにしてきてくれ」

「了解」

太陽の事もあるから一撃で終わらせ無ければならない

全力で行かせてもらおう

単一仕様・・・使うときか・・・

「いくぞっ!!」

俺たちは福音へ向けて飛び立った

「暫時衛星リンク確認。情報照合完了。目標の現在位置を確認。一撃で決めるぞ、一夏!」

「ああ！」

一夏が雪片の柄を握る手の力を強めると、暫時衛星から目標の情報を照合させた箒が紅椿を加速させる。加速と同時に展開された脚部と背部装甲は展開装甲の名に相応しい。箒は更に加速し、ついに二人のハイパーセンサーが目標の姿を捕捉した

（（あれか！））

3人の心の声が重なる。そのIS銀の福音はその名に相応しく全身の装甲が銀に輝いていて、日光を受けて輝いていた。何よりも異質なのは、頭部から生えた一对の巨大な翼。それは大型スラスターと広域射撃武器を融合させた特殊装備らしい

「目標との接触は10秒後、集中しろ！」

箒の声が聞こえた時には、既に一夏は意識を握った雪片と、目の前を飛翔している福音に集中させていた。一夏の集中に応えるように、雪片は輝きを増していく。福音と3人の距離は見る間に縮まり、

「うおおおおっ！！！」

福音が攻撃範囲内に入った瞬間、一夏は瞬間加速を発動させ、福音に向けて突っ込んだ。雪片の輝く刃が福音に触れた、と一夏が確信した刹那、福音は最高速度のまま体勢を反転、後退する形で3人と相対する。突然、福音が反転したことに一夏は面食らうが、引くには遅すぎるのでそのまま福音へと突撃した

「敵機確認。迎撃モードへ移行。銀の鐘、稼働開始」

抑揚のない機械音声がオープン・チャネルで聞こえると同時に、福音は身体を一回転させて一夏が振るう雪片を回避。逃すまいと、一夏も雪片を振るが、全てを紙一重で避けられ、零落白夜発動限界が迫っていることに焦りを覚えて大振りの一撃を出してしまう。その隙を逃すほど、福音は優しくはない

「!」

頭部から生えた大型スラスタ、その装甲の一部が開き、そこから砲口が覗く

「La・・・」

甲高いマシンボイスを放ち、福音は3人の視界を覆うほどの光弾をばら撒いた

「ちっ！シールドビット!!」

俺はすぐさま3人にシールドビットを展開させる

光弾がシールドビットに当たり轟音をだすがまだシールドビットは壊れない

「決めるしかない・・・いくぞ!『一騎当千』!!」

「シールドエネルギーを現残量で固定、スペックを2倍に引き上げます」

機械音声が緑式から聞こえ機体が軽くなるのを感じる

これが緑式の単一仕様能力、エネルギー残量を固定しどんなに攻撃を喰らおうともエネルギーは減らない。さらに抑えていたスペック

を開放することで戦闘力を上げる

卑怯ともいえる能力だ、ON / OFFは俺の意思で決定できるため
永久的に発動することもできる

「速攻で終わらせるぞ!!」

「ああ」

「分かっている」

一夏がまず攻撃を仕掛ける様々な角度から剣を振るがいとまたやすくかわされてしまう

その合間を縫って俺のライフルビットが福音を狙うがこれまでかわされる

「一夏!下がれ」

「くそっ!」

一夏が下がったところを俺と箒で斬りかかる

三本の刀が変則的に福音を襲うが福音もビームソードをだして応戦し始める

埒が明かないのでソードビットを天叢雲剣に装着させる

「『絶刀』一閃!」

最速で剣をふるう

だがビームソードで防がれてしまった、いや、防いだというよりたまたま軌道上にあったと言った方があっているようだ

タイミングを見て一夏が再び攻撃をするために接近してきた
今度は3人で一斉に攻撃を仕掛ける

さすがに対処できないらしく、福音は一気に距離をとった

「これ待ってたんだ!!」

俺は無限瞬時で福音に近づき攻撃を仕掛け一夏に飛ばす

「いまだ!やれ!」

「ああ、おりゃあああああ!!」

決まると思った瞬間頭部のスラスターが動いた

「まずい!一夏達、かわせ!」

「くっ!?!」

福音は再び銀の鐘を放った

しかし、俺の忠告を聞いていた一夏達は難なくかわした
今、福音は隙だらけだ

「やれ、一夏!」

「うおおおおおおお!!」

一夏が福音に向かう・・・かと思ったが一夏は福音の下を通り光弾
を切り捨てた

「何をしている!?!せつかくのチャンスに――」

「船がいるんだ!海上は先生たちが封鎖したはずなのに――ああ
くそっ、密漁船か!」

一夏が光弾をかき消した瞬間、雪片式型の光の刃が消え、展開装甲
が閉じる

エネルギー切れの証拠だ

「馬鹿者！犯罪者など庇って・・・そんなやつらは——！」

「箒——！」

「ッ——！？」

「箒、そんな——そんな寂しいことは言っな。言っなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて・・・どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は・・・」

明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆うその時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えた

具現維持限界——それは、エネルギー切れということだ

それに気づいた一夏は刀を捨てて一直線に箒へと向かう

俺も向かうが距離が離れすぎている！

「箒いいっ！——！」

最後のエネルギー全てを使っったの瞬時加速

そして福音は再び一斉射撃モードへと入り、箒に照準を絞っていた

エネルギー切れのISアーマーは恐ろしくもろい。なので連射攻撃を一度に受けたらひとたまりもない

それがわかっている一夏は必死に瞬時加速をした結果、福音と箒の間に割って入ることができた

「ぐあああつー!!」

箒を庇うように前に立った瞬間、あの光弾が一斉に背中に降り注いだ

「一夏あつー!!」

「う・・・あ・・・」

ちい！くそつ、俺は福音に標的を変え『絶刀』三閃を放つ
まだ、射撃体勢に入っていた福音はよけられずもろに喰らった
俺は『一騎当千』を解除して箒に近づく

「わ・・・わたしは・・・」

「箒!」

「っ!!む、霧人・・・」

「呆けてるんじゃない!!一夏を回収して撤退する」

「あ・・・ああ・・・」

福音の動きを確認するがいまだに動かない
箒が海面に浮かんでいる一夏に近づいたとき
緑式が新たな敵ISを補足した
大量虐殺の太陽か!?
反応した方を見ると金色のISが8個の砲身を箒に向けていた

「っ!!箒!!」

俺は瞬時加速で箒に近づき、箒を突き飛ばす
その瞬間、太陽の砲身から極太のビームが照射され、体中が焼ける
激痛が走る
シールドビットを展開していたが威力がでかすぎて溶けて爆散して
しまった

俺は何とか身体を動かし箒にプライベート・チャンネルを開く

「霧人！？霧人！！」

俺はいまだに照射されているビームに身を焦がされながら海中深くへと沈んでいった

箒の聲がただその場に響いていた

白は敗れ傷つき緑は海に沈む（後書き）

こんな感じです

実は明日から修学旅行なので

土日を更新することが出来ません
なので今回こっただけ書きました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3954x/>

I S 緑を纏うもの

2011年11月29日17時56分発行